

¥1500

畫報風俗奇譚

目で見る変態風俗絵巻

迫真妖美凄絶緊縛写真集
豪華艶麗悦虐傑作名画展



昭和三十三年五月十五日印刷
昭和三十三年五月十五日発行

画報風俗奇譚

目で見る変態風俗絵巻

画報風俗奇譚

昭和三十三年五月十五日印刷
昭和三十三年五月十五日発行



定価280円



(上)ドン・ファン、乳房に魅入られるの図 (葛飾北斎筆)
(左)石川や釜の煮え湯はつきるとも世にゆでもものの種はつきまじ
(西鶴の「好色一代女」より)



浮世絵に見るナルシズム (美姫顔世の自己陶醉) 一魁斎芳年筆

蛇とたわむれる女





画報風俗奇譚 目次

(多色刷口絵)庭園の妖魚	一 魅 斎 芳 年 筆 (表紙裏)
浮世絵にみるナルシズム	葛 飾 北 斎 筆 (表紙裏)
乳房に魅入られたドン・ファン	フ ァ ー ラ ・ モ ル 筆 (折込裏)
山 猫	パ ウ ル ・ カ ム 筆 (折込裏)
人 間 馬	
蛇とたわむれる女	(目次裏)
乳房を吸わせる女	(目次裏)

グラビヤ口絵



(口絵)羞花八態 釣りしのお・あじさい・海棠・ガーベラ ひまわり・ダリア・アマリリス・ばら (三七)

土居啓子無残画帳	裸女標本・人間みの虫 首輪憂愁・鞍馬地獄 (四九)
小田利美責め絵アルバム	逆吊り美女・おとこ馬 猛獣の餌食・片足踊り (四九)

写真ストケダモノの夜	奥 台 茂 春 (二四)
恋慕執念	中 川 清 太 郎 (二六)
奇妙な体験	稲 田 勝 造 (二六)

人食い虎の爪跡	佐 藤 仁 (二二)
女郎屋の女主人	七 原 藤 太 郎 (二四)
風車小屋の美女	村 松 俊 一 (二六)
イレズミした女スパイ	竹 内 信 次 (二八)
ハレムみな殺しの歌	浅 海 良 吉 (三〇)
モウモウ団恐怖の檻	大 山 健 彦 (三二)
海亀島の死の闘争	水 野 幸 吉 (三四)

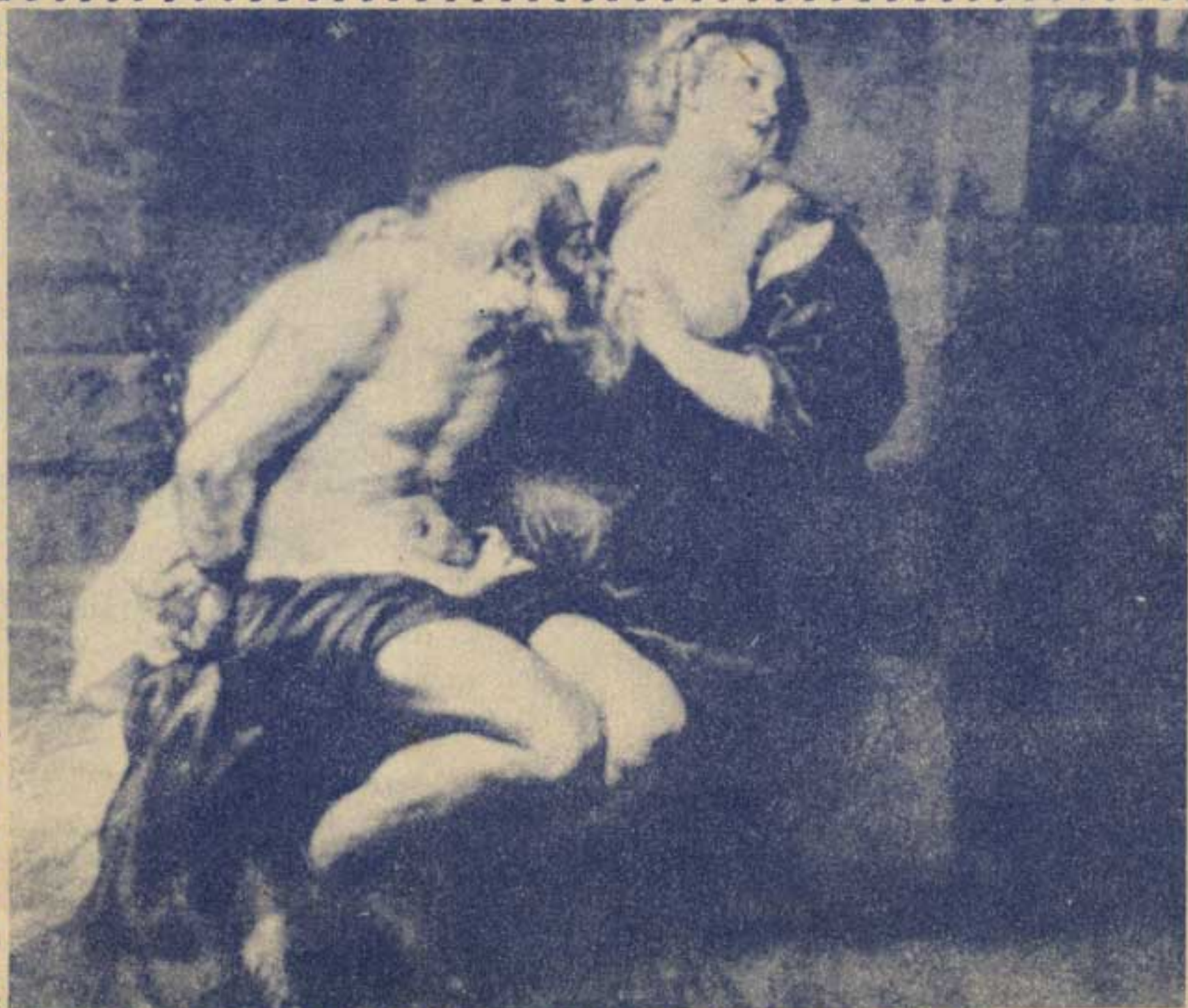
変態猟奇風俗名画集	淫乐的殺人・ジュヴエナルに寄せ る・殺人現場・人首改造の図ほか (六九)
-----------	--------------------------------------

残虐なる女たち	ヘーゲマンをはじめパウル・カム などの筆になる女性の残虐行為図 (八〇)
鞭打つ女性たち	鞭打に狂う女性を主題にしたヘーゲマンをはじめとする世界の名画 (八二)

ドミナ・赤い悪魔・ヴィナス	パウル・フル・シュリヒテル筆 (九六)
---------------	---------------------

東西快樂的な入浴風景	フランス・イギリス・ドイツ・日本など東西古今の入浴の傑作絵画 (九二)
------------	-------------------------------------

乳房を吸わせる女



庭園の妖魚

あやかしの白い肌は、木かげの白かげ、もろつけば、釣られ、
た魚のように、かの女は、身もたれして、えも言われぬ妖氣を放つ



→ ファーラー・モル筆の「山猫」

← パウル・カム筆の「人間馬」



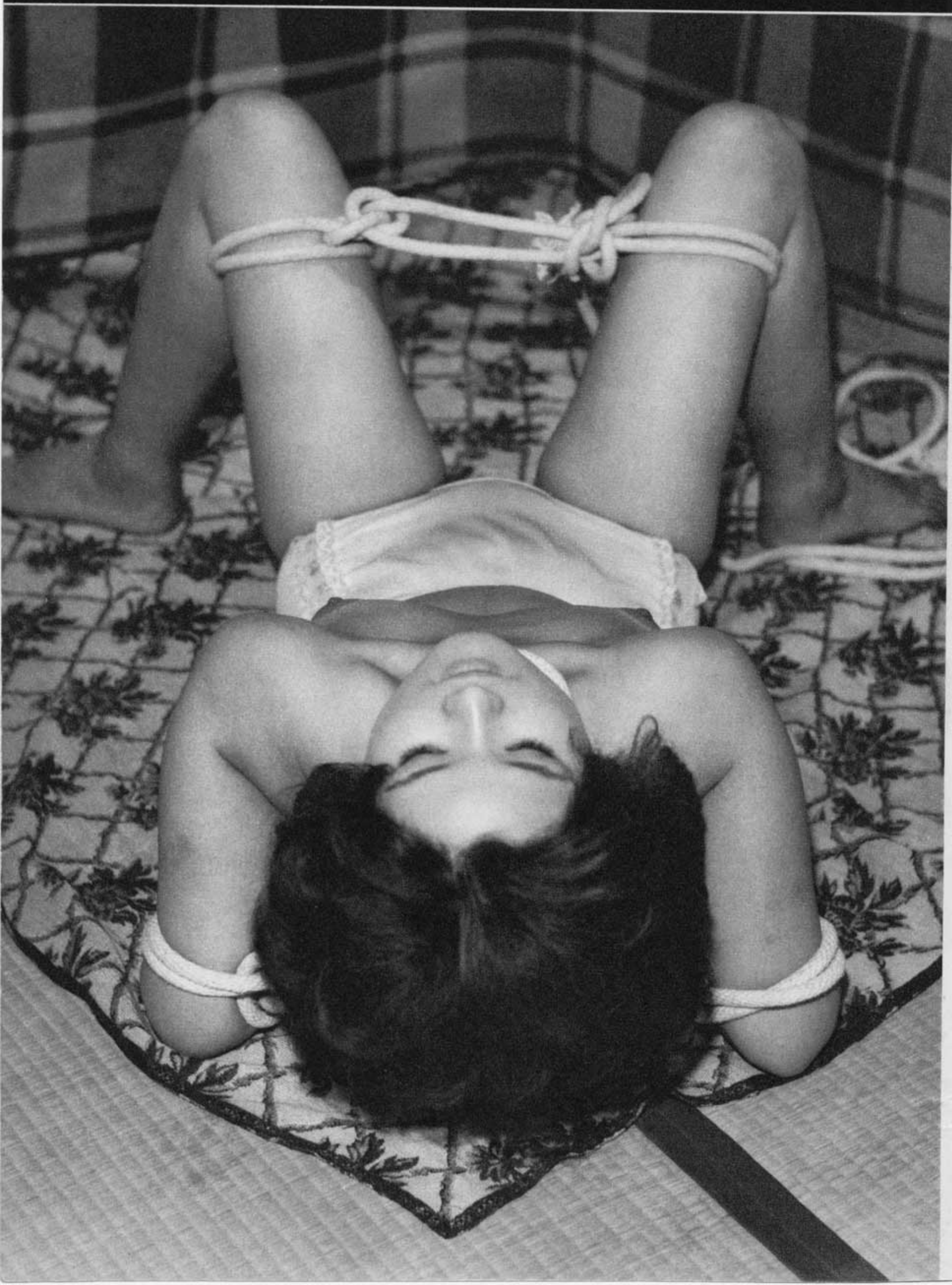
譚奇俗風報画



浮世絵は、わたしたちの先人の残した偉大な
芸術、そして、わたしたちの心のふるさと。

裸女哀歓

しばられて あきらめて 身を投げたところ
に よろこびと悲しみの灯がともる



首しばり

女の首は愛欲の急所　そして喜びと悲し
みの泉の栓　そこを縛られて女は　心の
炎を燃えたたせ　からだの肌を輝かせる









まひるの悦虐

まひるの 木もれ日は ちらちらと
白い肌に落ち 乳房にたわむれる
縄は女を 立木や垣根にしばり
石に つなぎとめる 悦虐の一時よ



落花有情

花に嵐は 無情というが
女に縄は 濃艶有情
色とりどりに なまめいて
女ごころの 切なさ つらさ
花に嵐は 吹こうとままよ
女に縄は かけるがなさけ
色に出にけり うれしさが
女の肌の 奥の奥から





どうとでもして

しばらくたあたしは たと
えてみれば籠の鳥 飛んで
逃げるわけにも いかない

だから あたしはあきらめ
た どうぞご自由に お好
きなように していいわよ



置き物美女

床の間には 掛け軸があり 花がいけてある そこに
生きている置き物の裸女をひとり その裸女は手も足
も首までも 所どころか全身をぐるぐる巻きにされ
て ひっそりと 何を待っているのだろうか あわれ
いましめの身で 何を待っているのだろうか

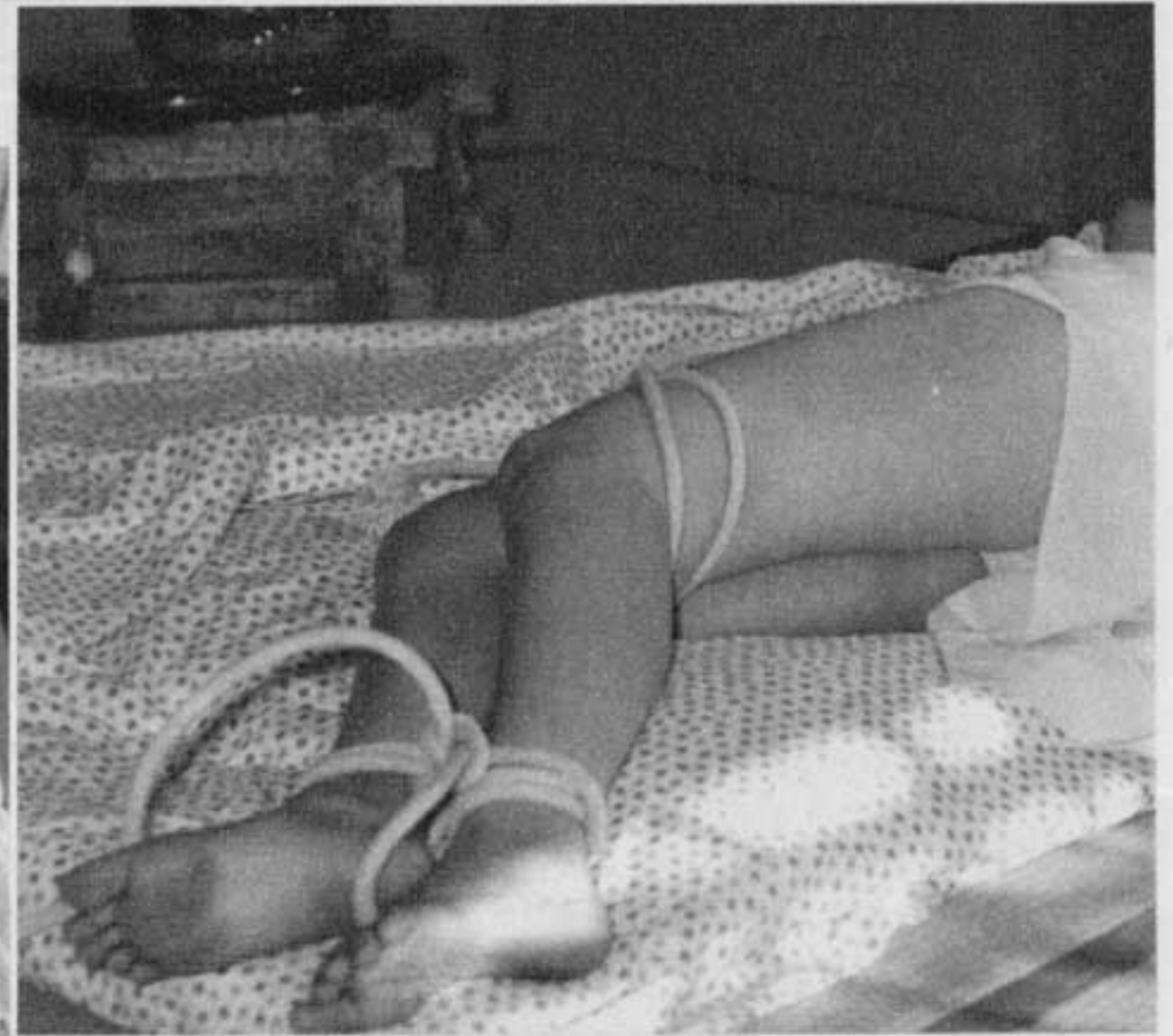
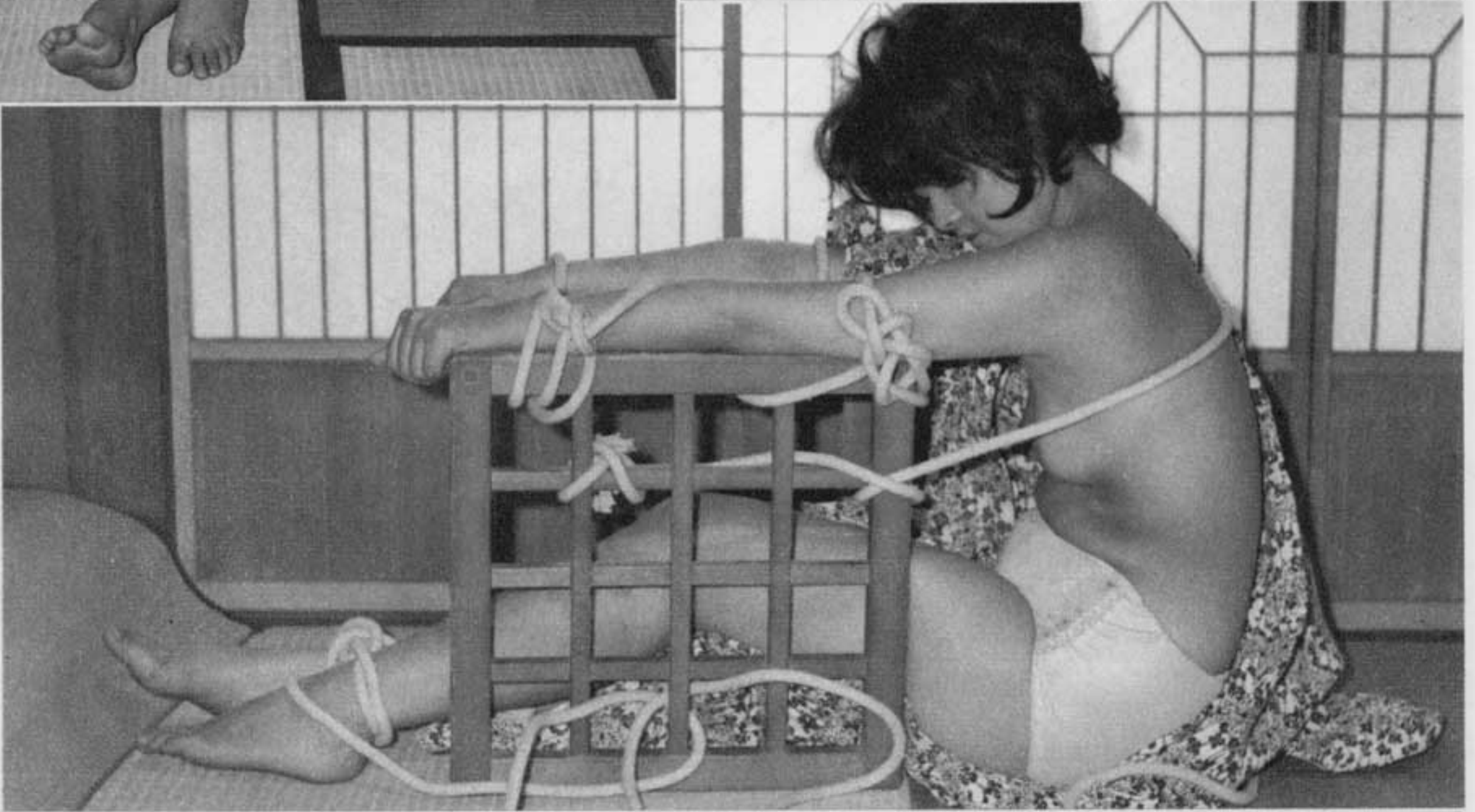




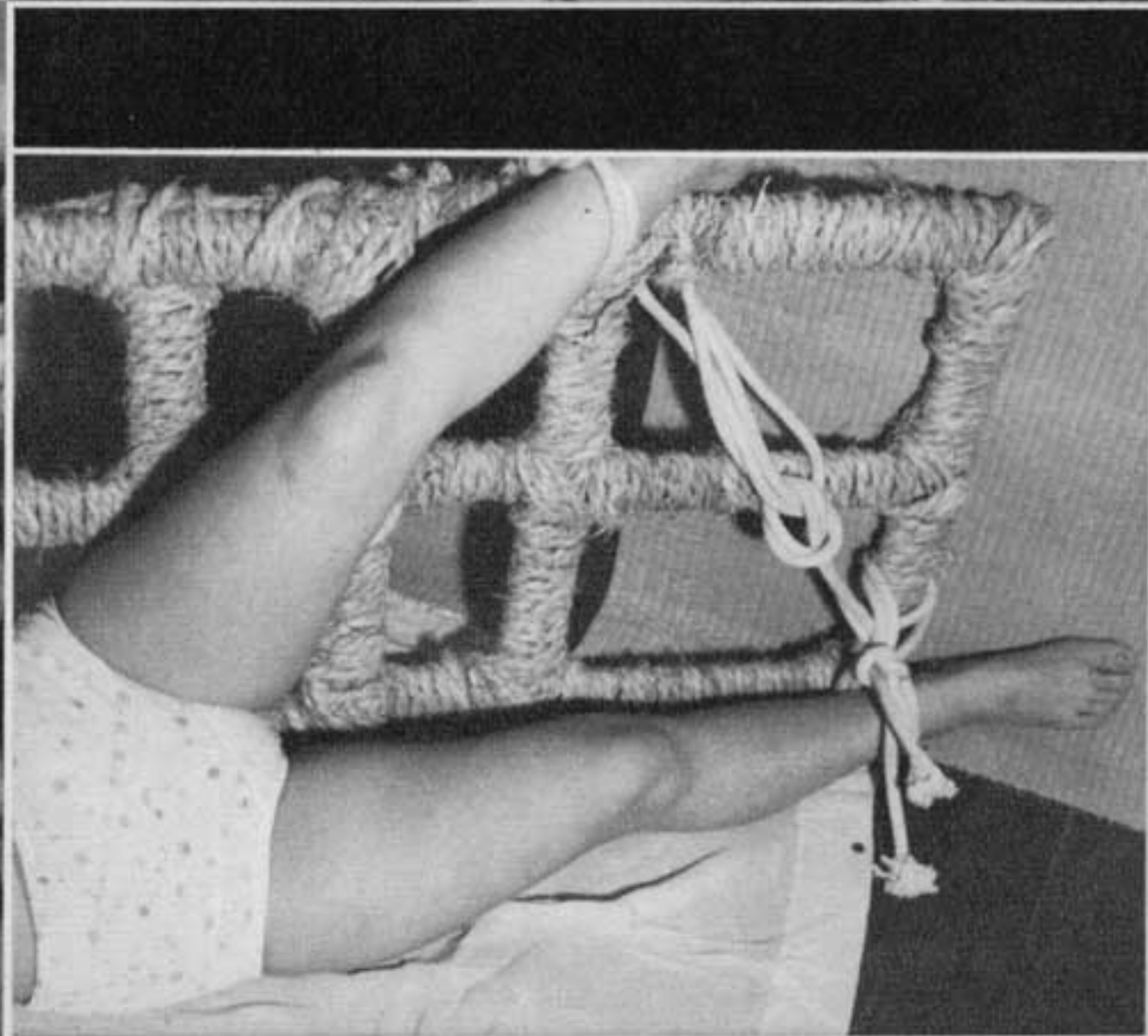
凄 艶 の 閨

長々と布団の上にほうりだされて
さいなみの時を 今か今かと待つ
女の性のやるせない いとしさよ

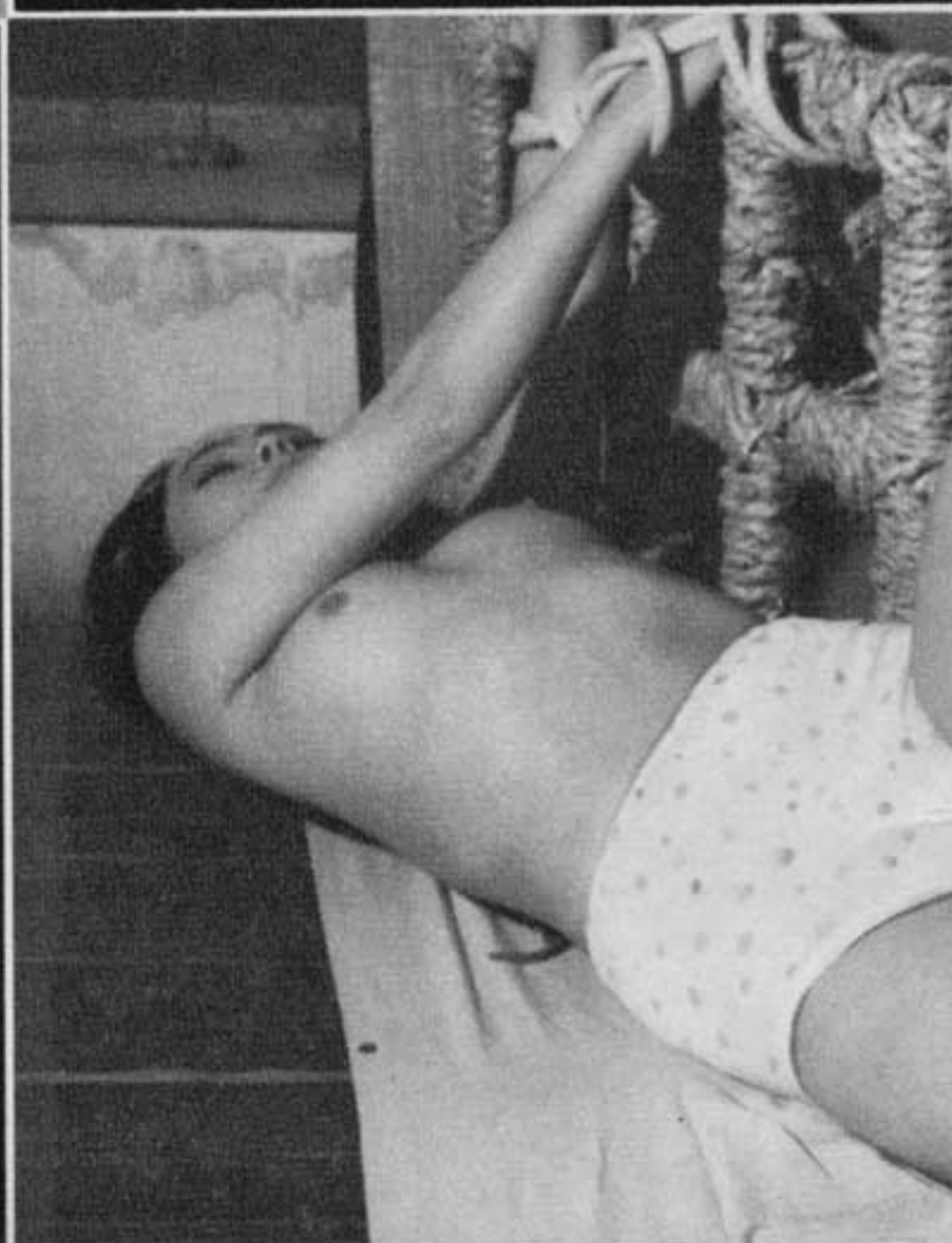
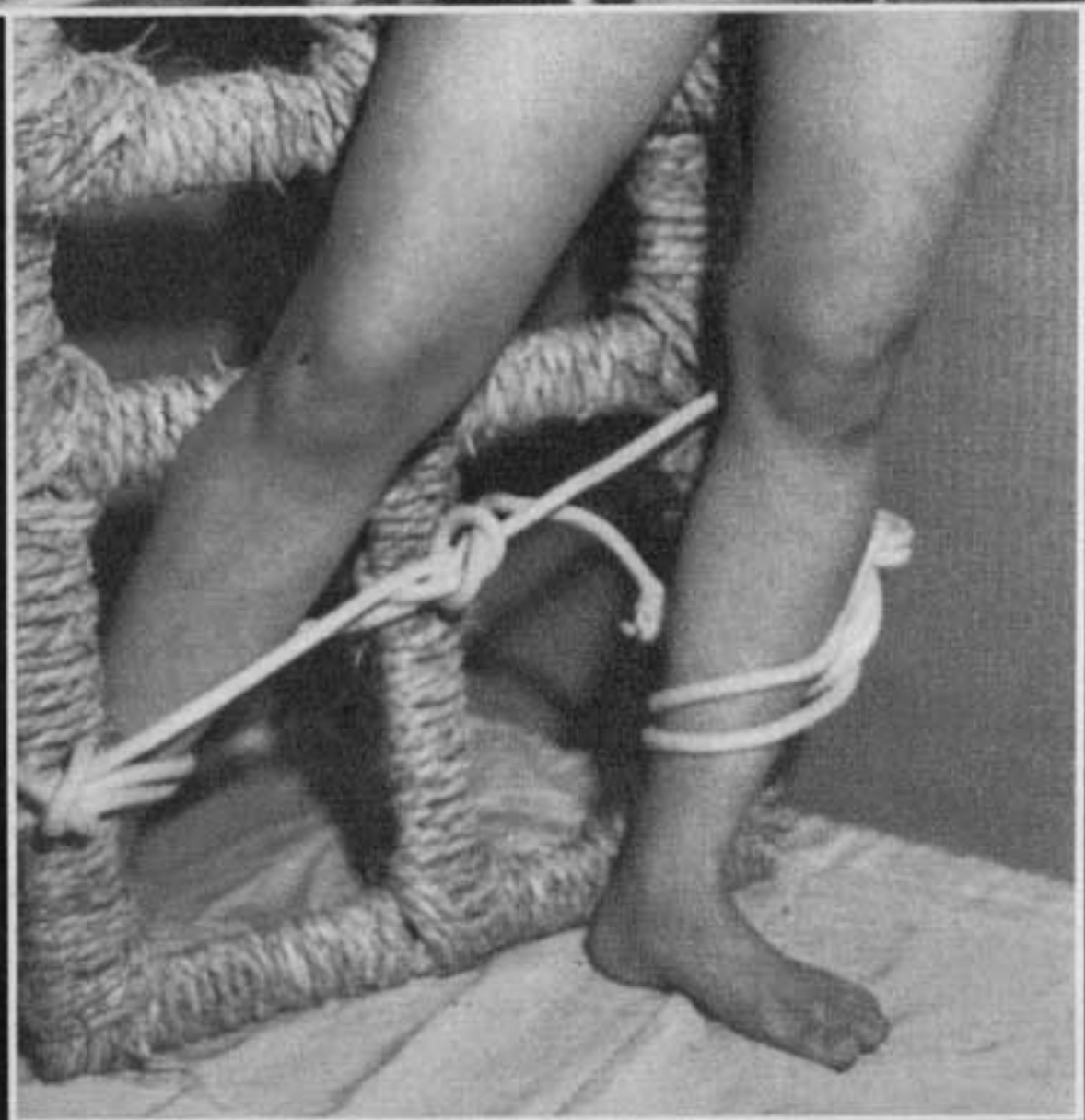
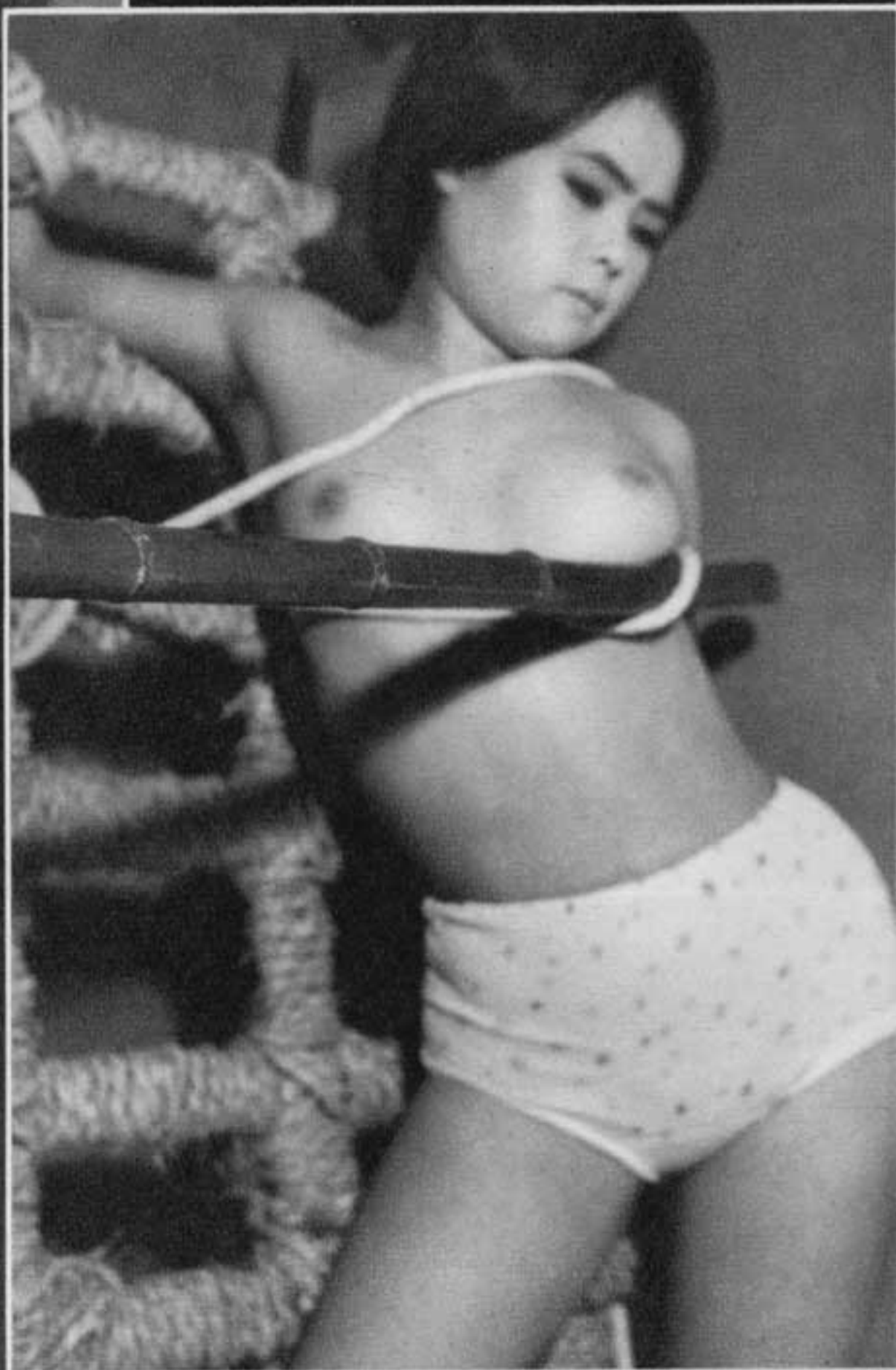




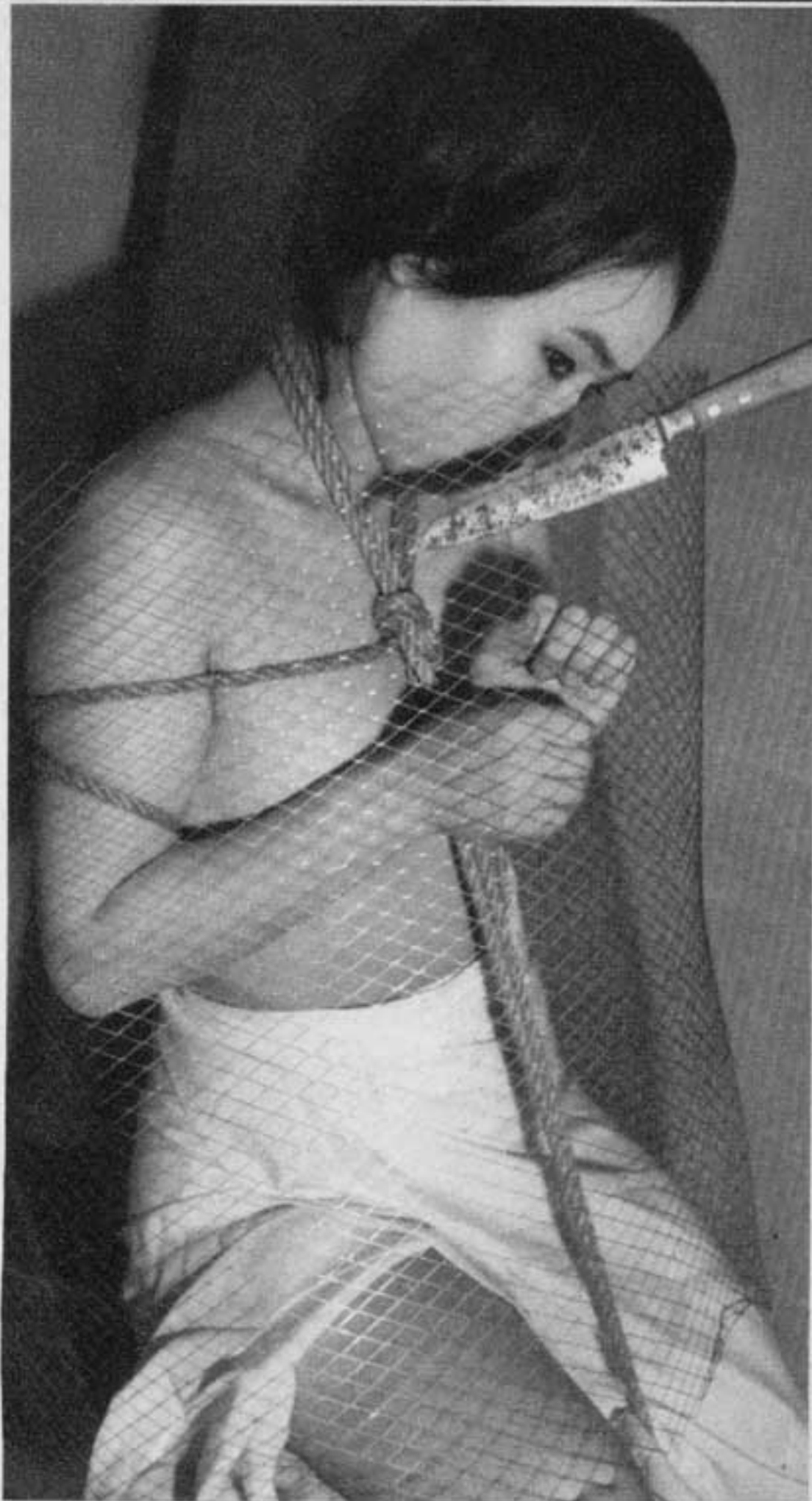
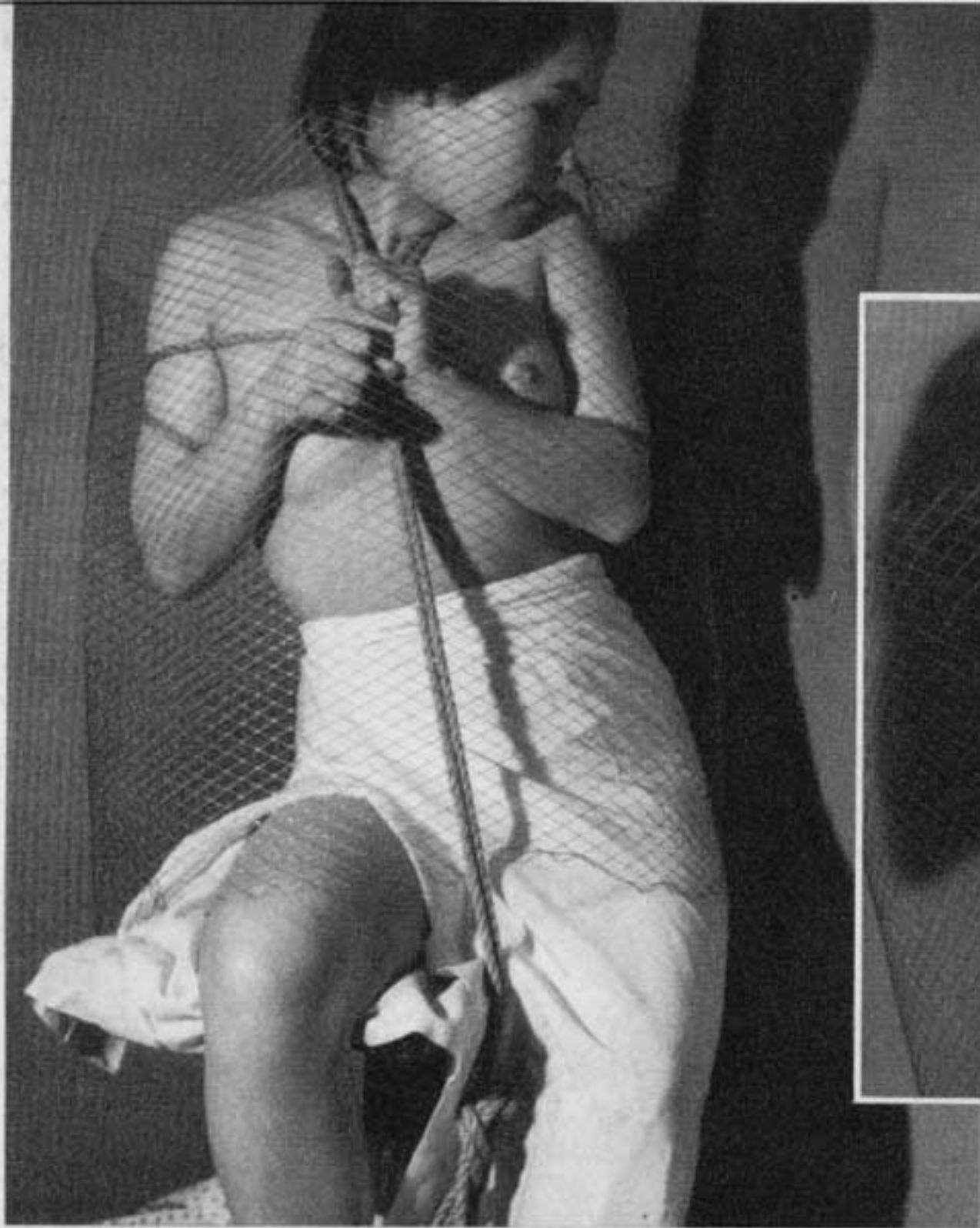
責め



格子



金網責め



女と縄のプリズム

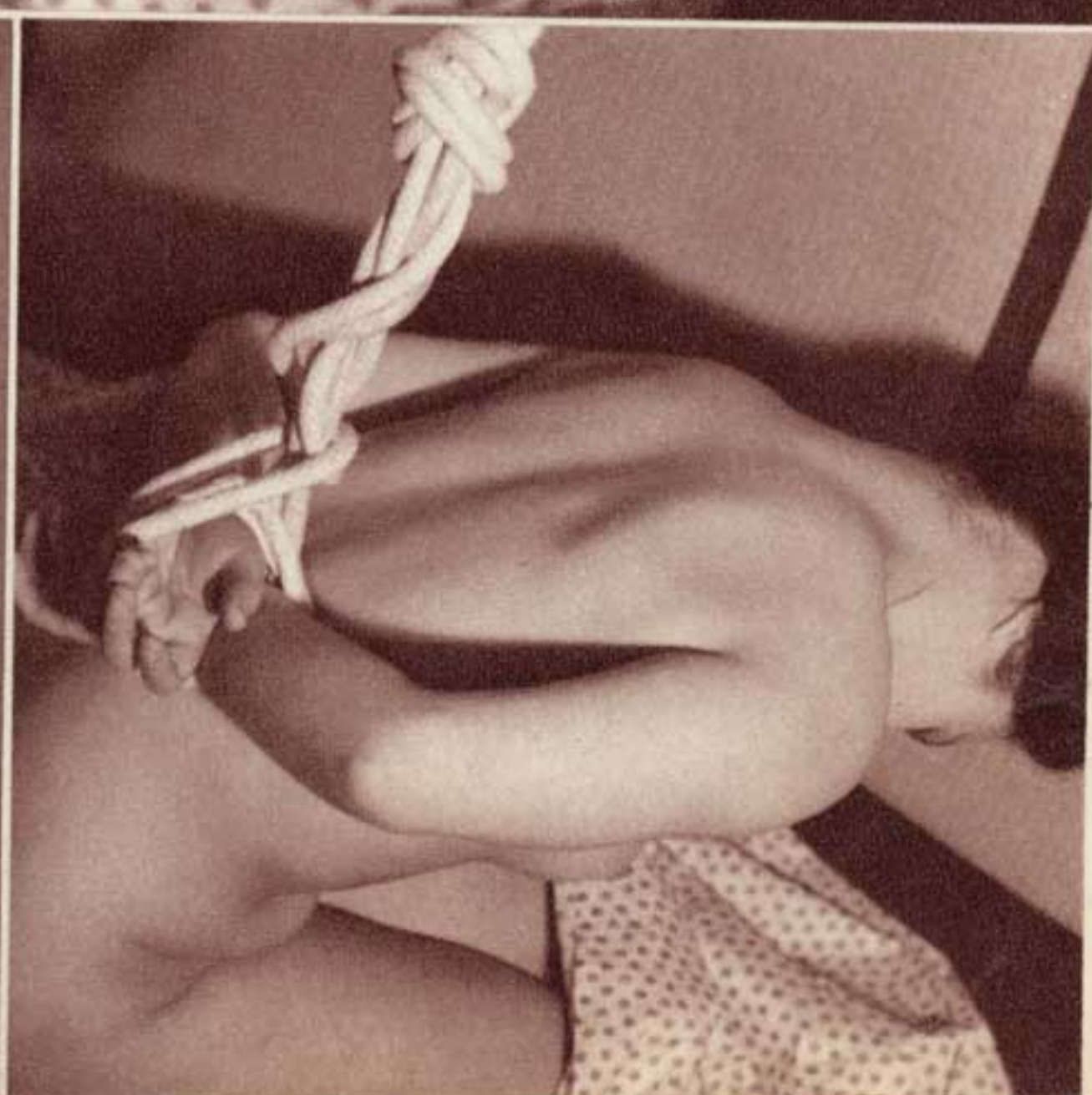


女と縄が組み合わされるとき、そこには奇妙で妖美な世界が花ひらく。女にとっては喜悅であり陶醉であるし、男にとっては興奮であり刺激である、マカ不思議な天国への門の扉が開かれるのだ。その七色模様の美しさ！

釣られた人魚

うしろ手にくぐられてグツと吊られる時、
苦痛が、頭のでっぺんから足の爪先までつっ
走る。戦慄が、電流のようにつらぬく。その
苦痛は、瞬間に喜悦と変わり、その戦慄は、
陶醉となる。そこから生まれる甘美な世界。







二人責め
二人縛り



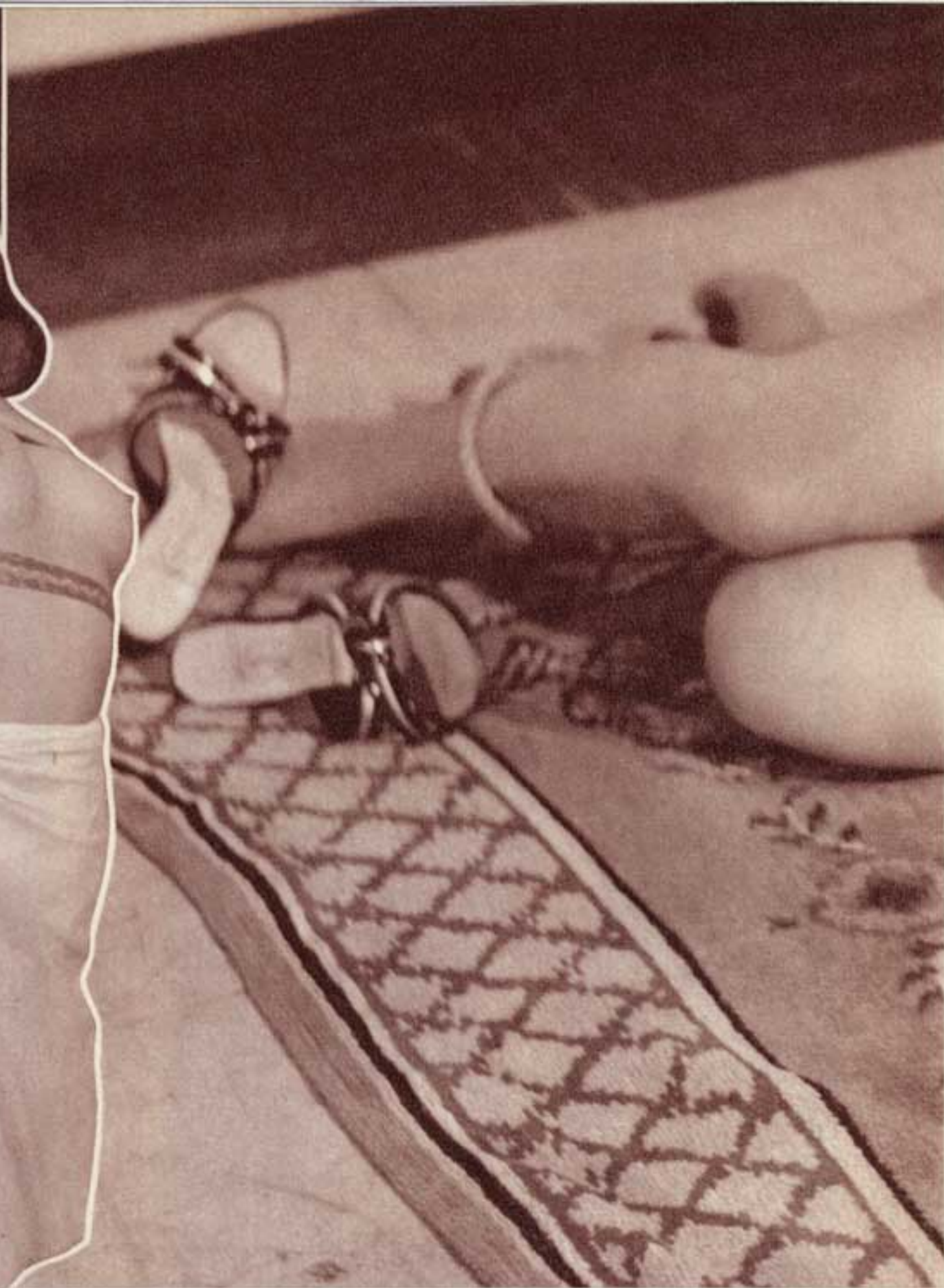
一本の竹ザオは
二人のからだをつなぎ
三角縄の緊縛で
四苦八苦の疼痛を与え
五臓六腑にしみ渡るとき
六情をまぜ合わせ
七弦琴のように
八方天のかなたから
九十春光の境地が生まれる





艶肌無残

女は生来、責められるように、できているのだろうか



縄と木杵

縄と木の杵が女体をしめつけ、動きを制限する。薄もの一枚が女の大事な個所を覆っているとはいっても、限られた世界にも、女の喜びが湧きいでるものなのだ。



羞花八態



釣りしのぶ

釣られたしのぶは鑑賞用、釣られる女は被虐のいけにえ



あじさい 七色変わる花もあれば、七変化する女もいる



海 棠

雨にうたれて風情あり、縄につながれて色気あり

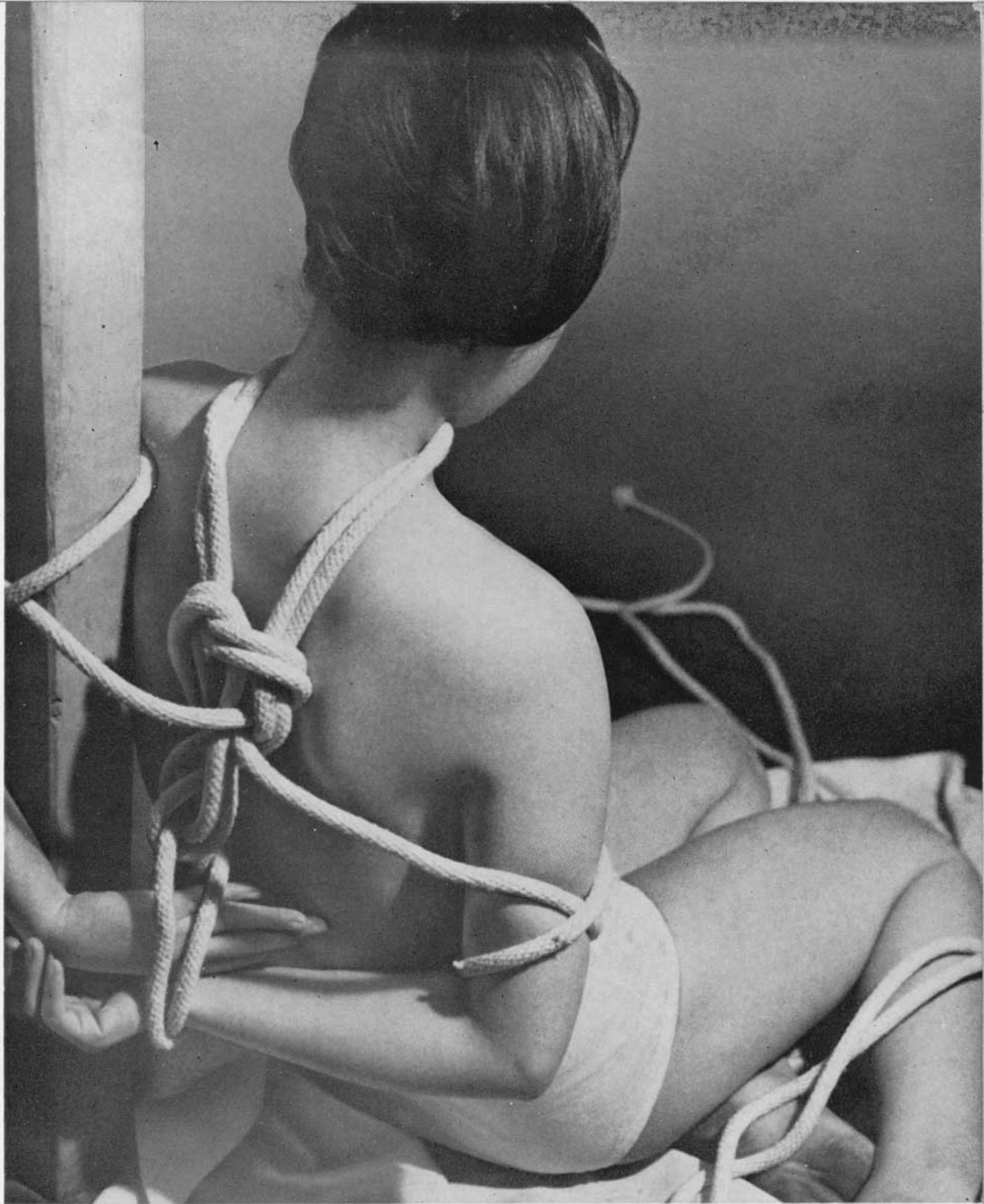


ガーベラ 鮮烈な色をまきちらし、投げだされた花びら



ひまわり

逞しい生命力があふれ、燃えあがるのは情炎



ダ リ ア

強烈な刺激のなかに目を奪う絢爛たる肢体



アマリリス ひっそりと息づき、つつましかににおう肉のほむら

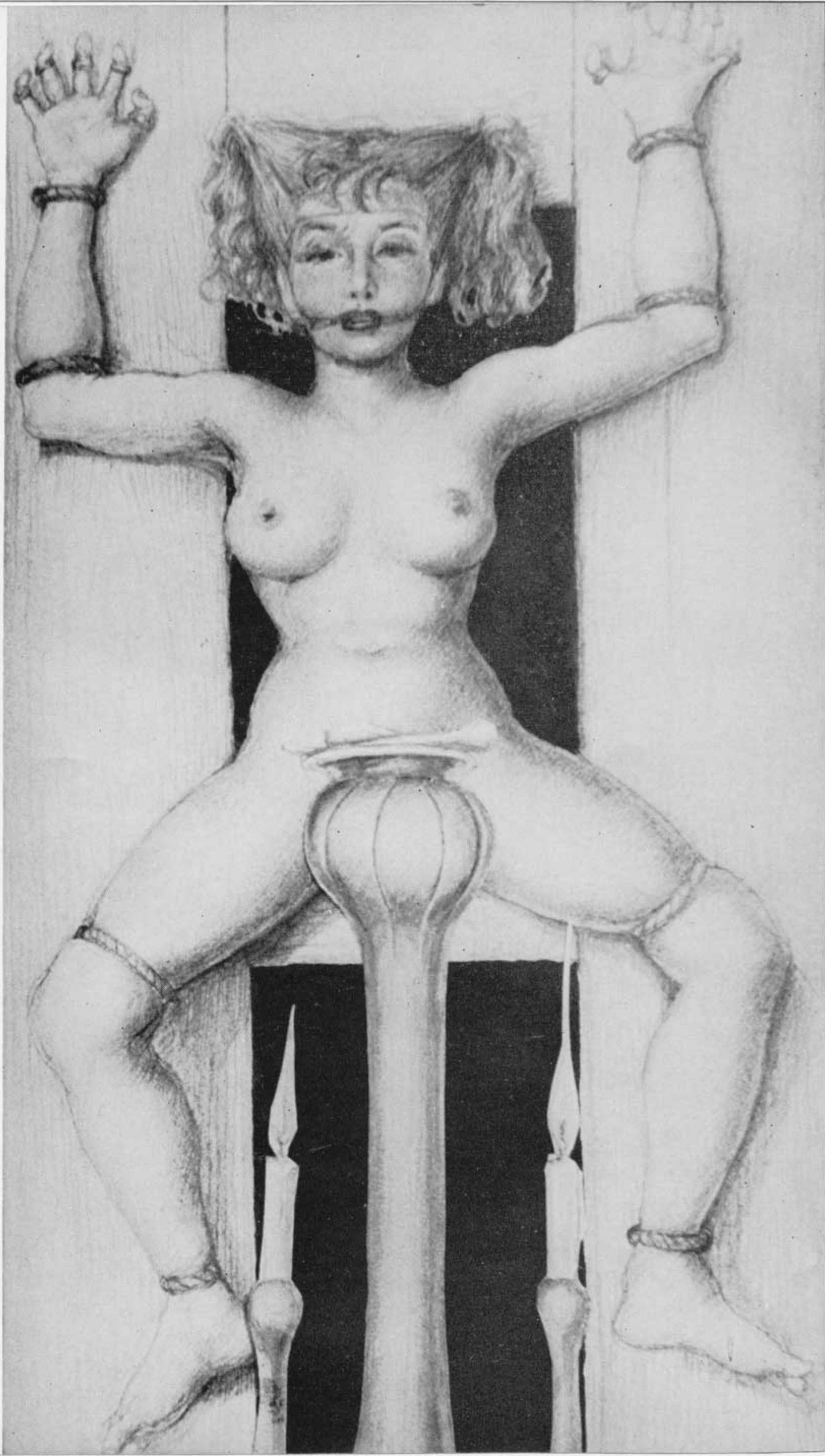


ば ら はなやかに咲くすれ、垣根にまといつく白い肌

土居啓子無残画帳

裸女標本

手も足もひらいて、昆虫のように壁に
留められ、ローソクの火で焼かれる業



人間みの虫

鉄と皮でできたブラジャーとパンティー、そして全身をしめる鉄の輪、釣るされて身動きならない



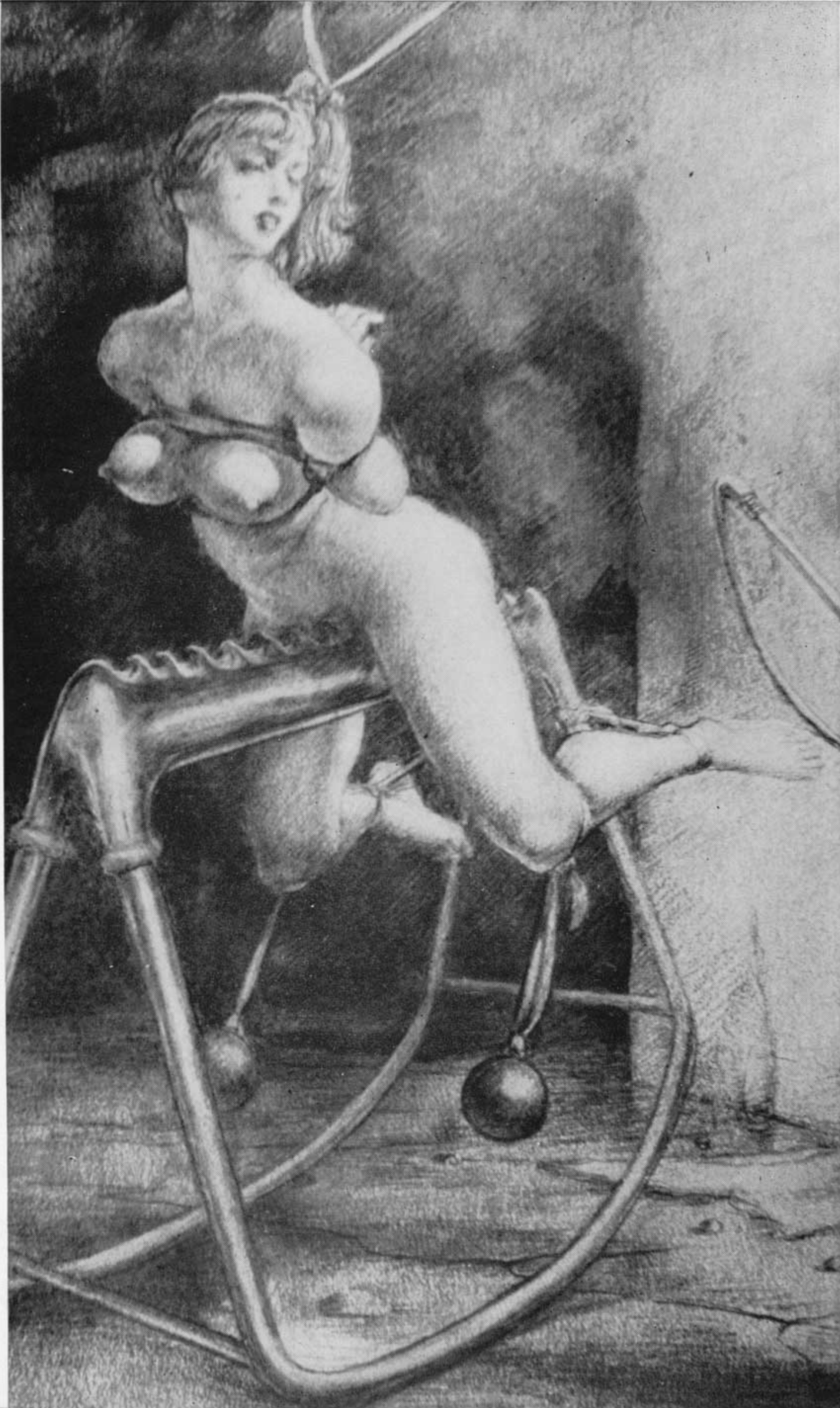
首輪憂囚

犬のように首輪をつけられ、乳房は皮バンドできっちり締めつけられた、あたしは、とらわれの犬



鞍馬地獄

齒形のついた鞍にのせられ、足には鉄アレーをぶら下げられて、これは逃がれる術のない無限地獄



小田利美責め絵アルバム

逆吊り美女

うす暗い地下室に吊る
された、白いコウモリ



おとこ馬

ハイシドウドウ、はいはい上手、ご褒美にリンゴをあげよう。だが、拍車が鋭く尻の肉を切り裂く



猛獣の餌食

足には鉄丸の足カセ、手は檻の鉄棒にしばりつけられた裸女のやわ肌、いま猛獣の熱い息が迫る



利

片足踊り

片足はクサリにつながれ、ウイーンチで吊り上げられた美女は、男にとって、またとない酒のサカナ



利



聖 殉 教 者

女が男のイケニエになるとき、それは、宗教に殉ずる聖女の境地だというのが……



祭台のイケニエ

マナイタの上のコイは覚悟を決めてビクともしない
というが、長イスの上の裸女は、しばられたまま息を
ひそめて、次の運命を待っている。長イスは祭台、裸
女はイケニエ、そしてこれから行われる悦虐の狂宴！
いったい、だれが、この祭典を演出するのだろうか。



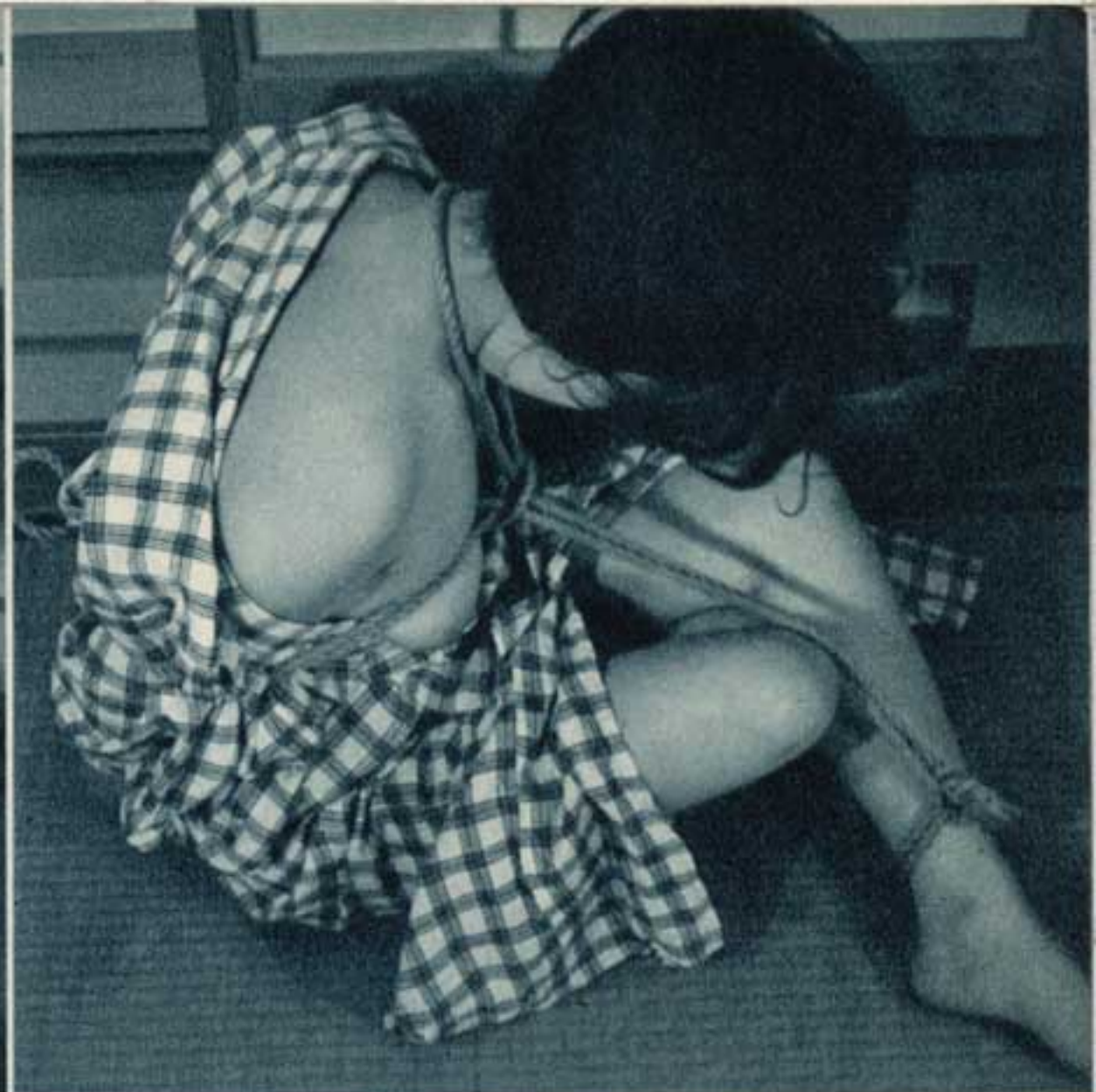


捕われの蝶

クモの網にかかった蝶の
ように、羽をもがれ、痛め
つけられる女。肌着も乱れ
白い裸身もあらわに、あえ
ぎ、もたえる妖しの姿態。









浴衣受縛

ただ一枚の浴衣は 身にまとった 最後のもの
そのうえから ぐるぐると縛りあげられ
て あやしくも なまめかしい女だけの世界
が 肉体の奥の奥から おもむろに 花をひ
らく 静かな炎が 音もなく 燃え燃える

められて

容赦なく肌にくいこむ。それが、手に、足に
れる。そればかりか、チューブがギリギリと
の自由を奪う。女を責めるためには、どんな
いいということが、ないようだ。



鉄の輪にいまし

チェーンは細いけれども、
巻きつけられ、鉄輪に固定さ
裸身をしめつけ、縄がからだ
ことを考えだしても、それで

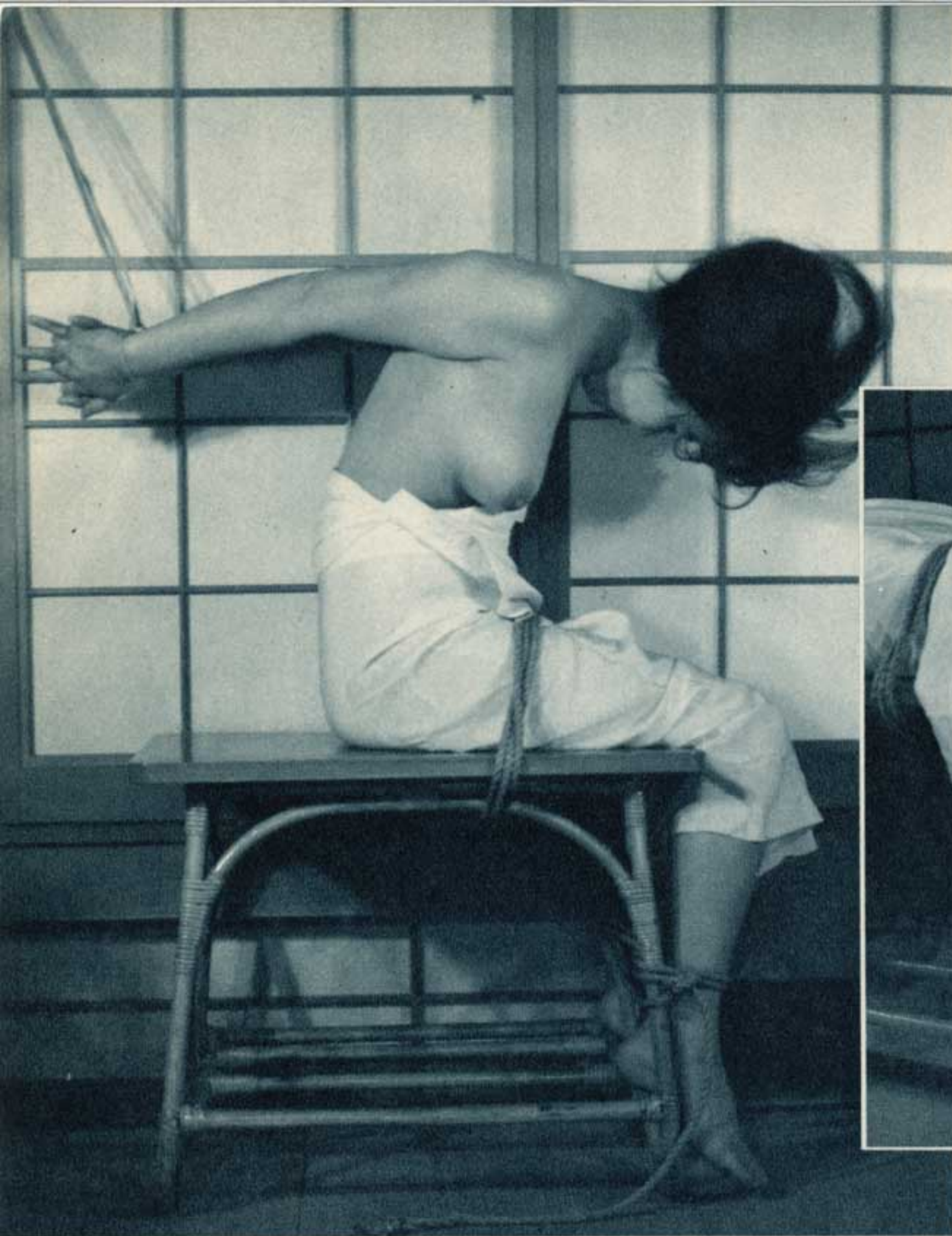


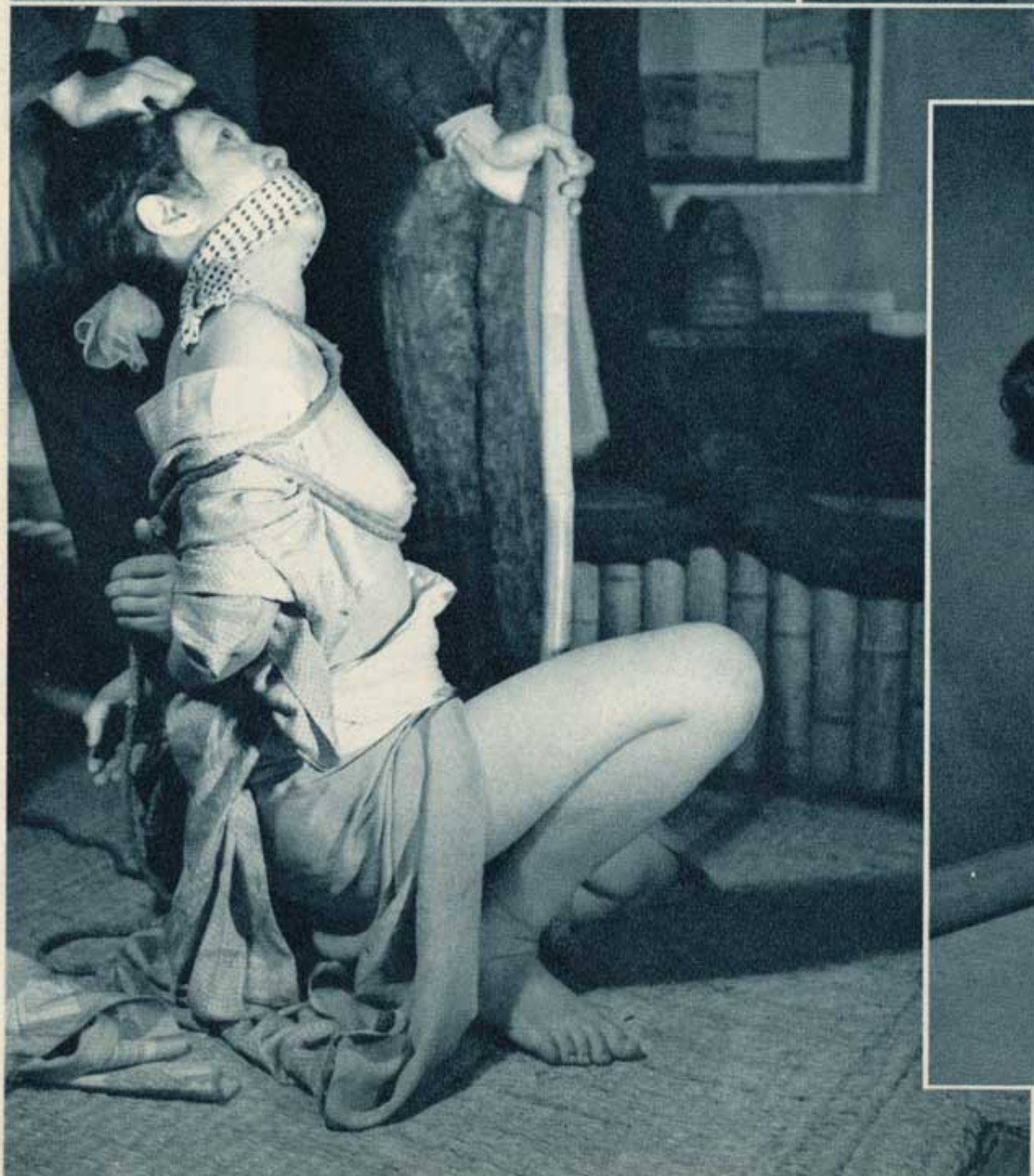
れる白肌

火鉢の炭火が顔面に、煙草の火が乳房に、
押しつけられようとする。その苦痛を乗り越
えて、えも言われぬ陶醉が訪れようとする。



痛めら





呪縛シンフォニー

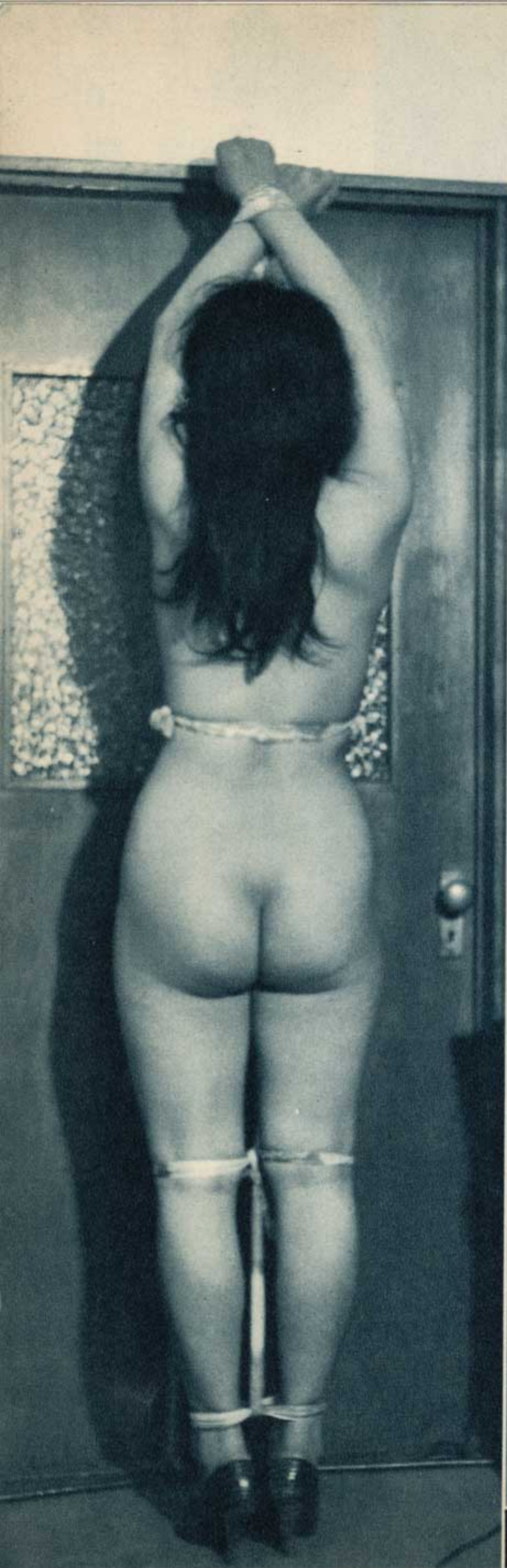
変ハ調で 縄と 猿ぐつわとが 奏でる序曲
女体被虐のタクトがふられて
ピチカッとは 最高潮にもらす 喜びの声
いま 白い肌にかかれた五線の音符をたどり
盛りあがる情感のオーケストラ



像立難受

竹の棒は、からだを曲げないためのギブス。そして、女体を縛って離さないための責め木。





ドアは、頭上で手首をしばって固定するしめ木。そして、女体をハリツケにするための壁。



同性愛慕

二つの白い女体が
かもしだす世界
妖しくも 悲しい
ソロと同じ意味の
デュエット



变态獵奇風俗名画集



淫樂的殺人（筆者不詳）



背教者青年の淫逸生活（筆者不詳）



ジュヴェナルに寄せる（ピアズレー筆）

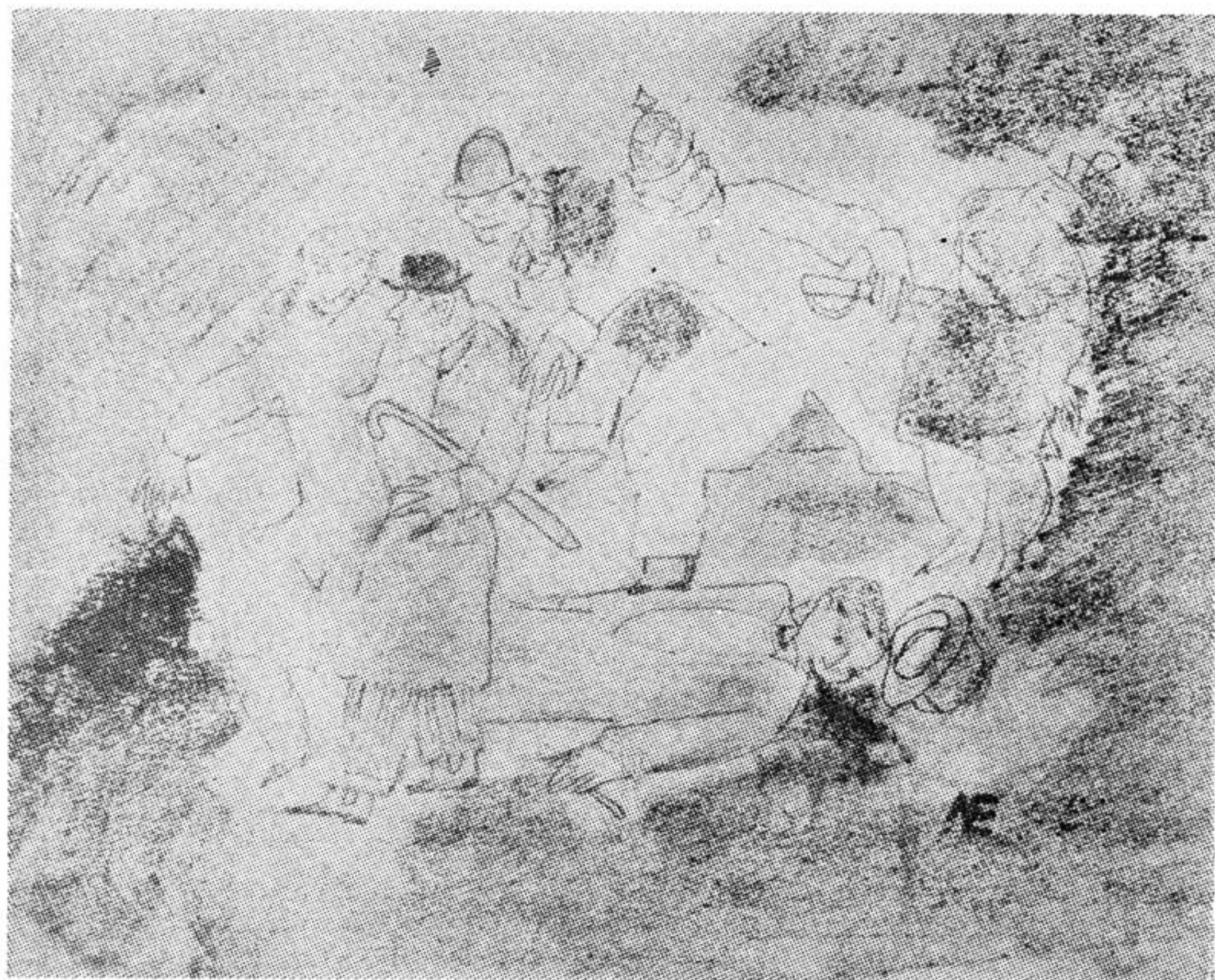


上・チェルカシアの商品（女奴隷の売買）

下・愛欲のカセに苦しむ女の生涯



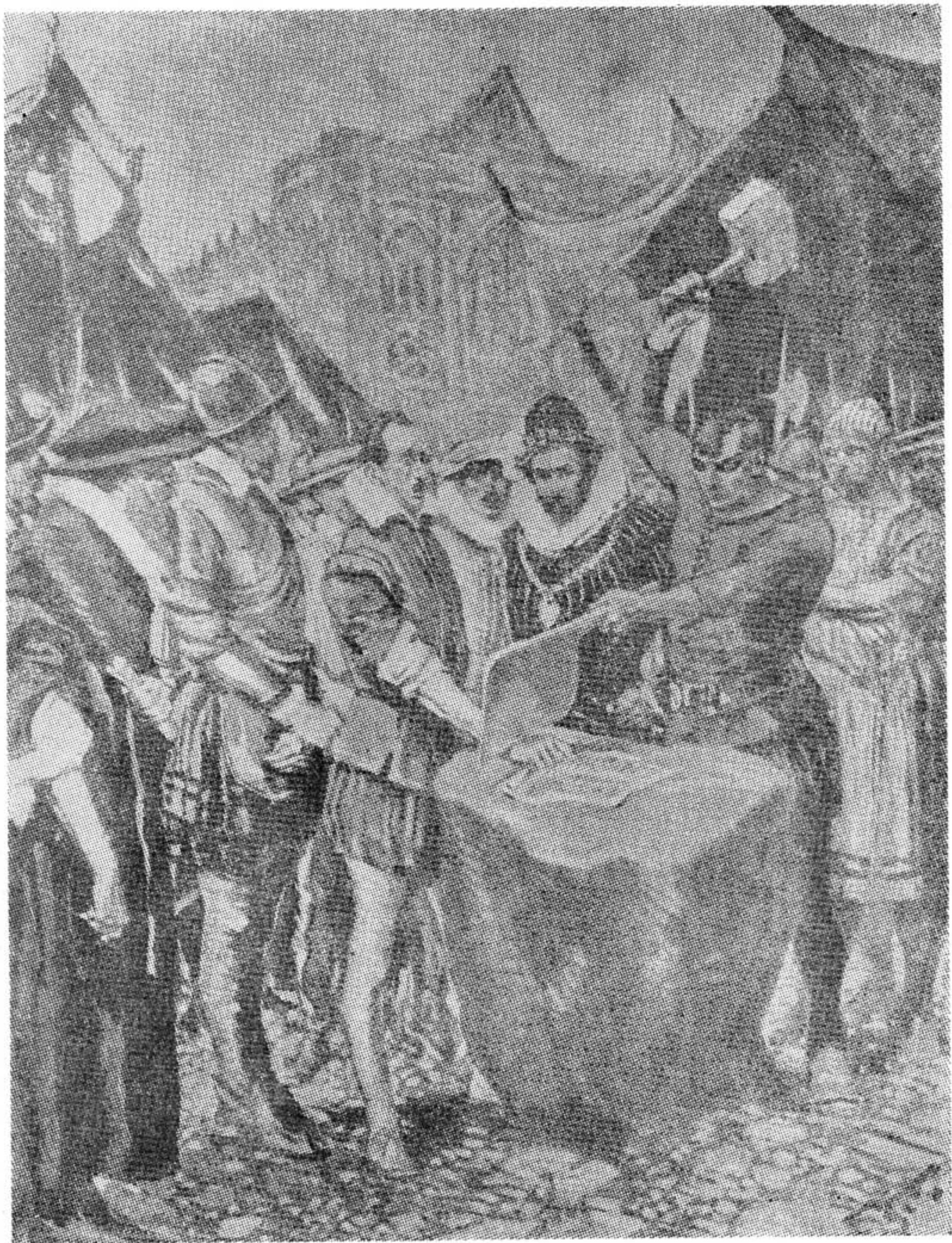
ジャック・ザ・リッパー (エルンスト・シュテルンの石版画)



殺人現場 (ニーマン・エグベル筆)



上・人首改造の図，下・首を切られても商売を忘れぬユダヤ人（ともに筆者不詳）



1581年ごろのイギリスにおける筆禍事件の刑罰



むかし中国で行なわれた竹筒の刑

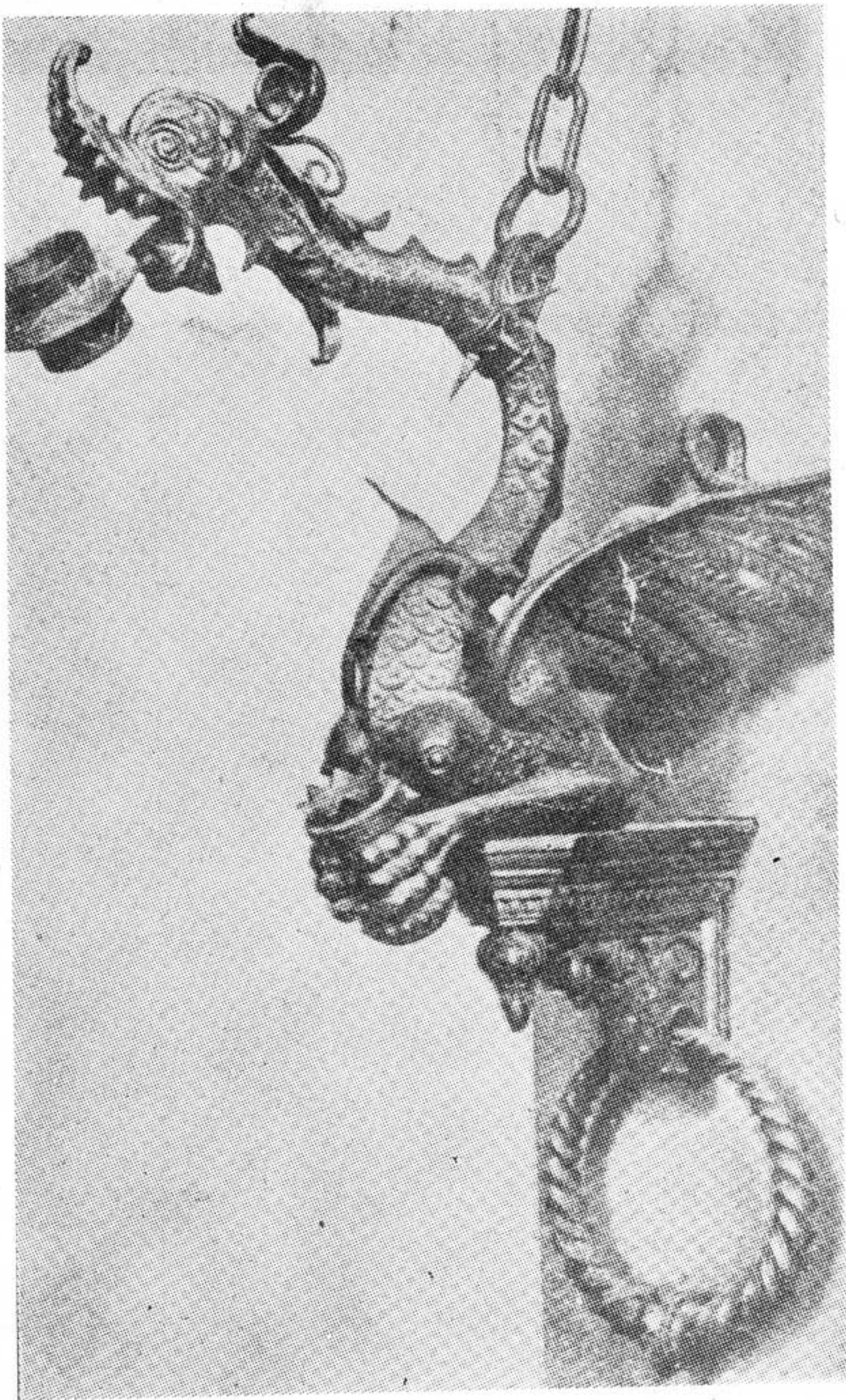


ドイツの無残な処刑

国家社会主義者の指導者ゲーベル博士は、1925年、ドイツのヒンデンブルグ大統領選挙のさい、ベルギー守備隊の手で投獄され、ベルギーの士官たちに、馬のムチで打たれた。



怪物パイプ（筆者不詳）



国旗挿し（中世紀に栄えたイタリアのシエナ市で使っていたもの。ドラゴンがシルクハットをくわえた形が珍しい——イギリス・ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館所蔵）

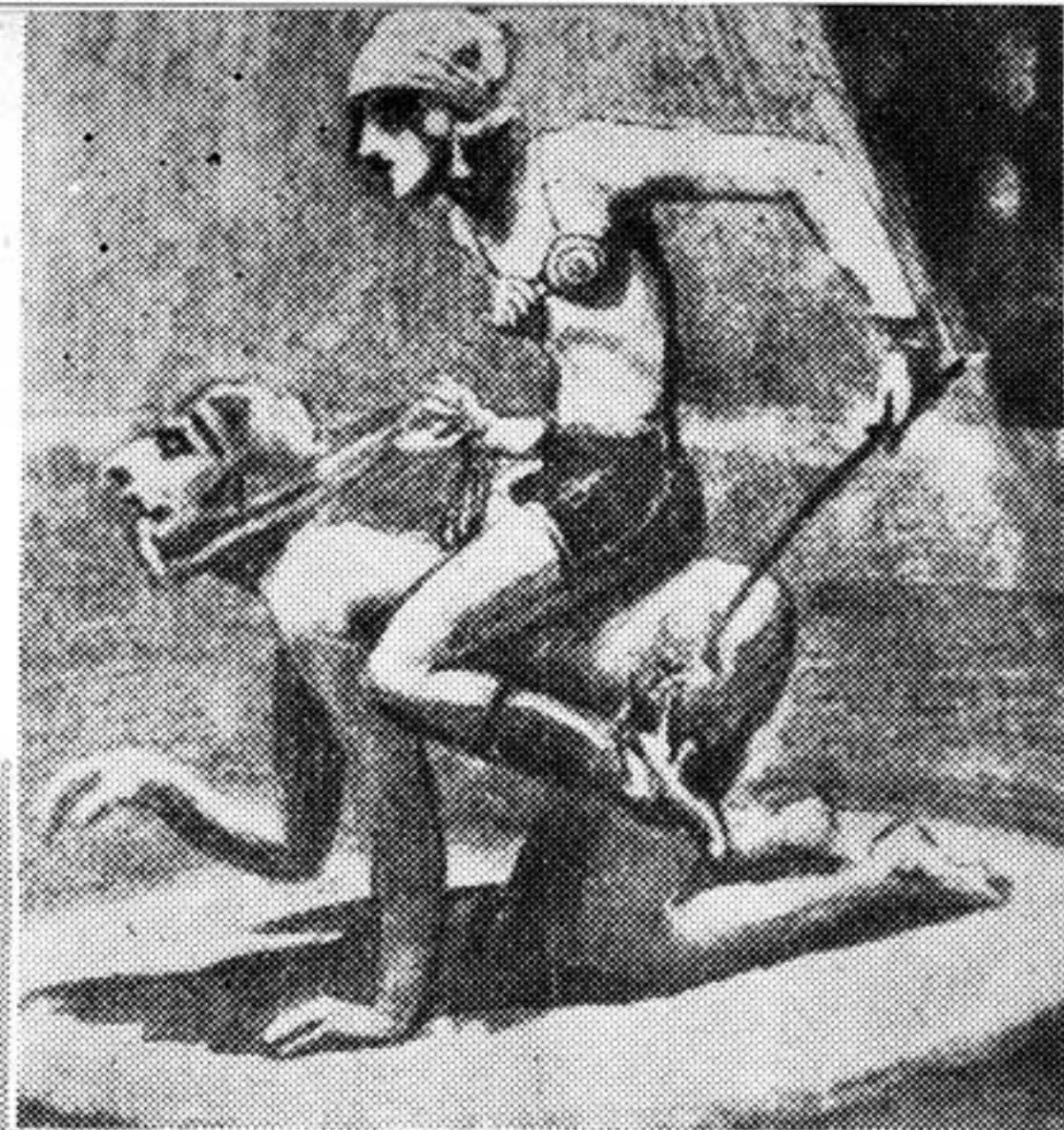
残虐なる女性たち

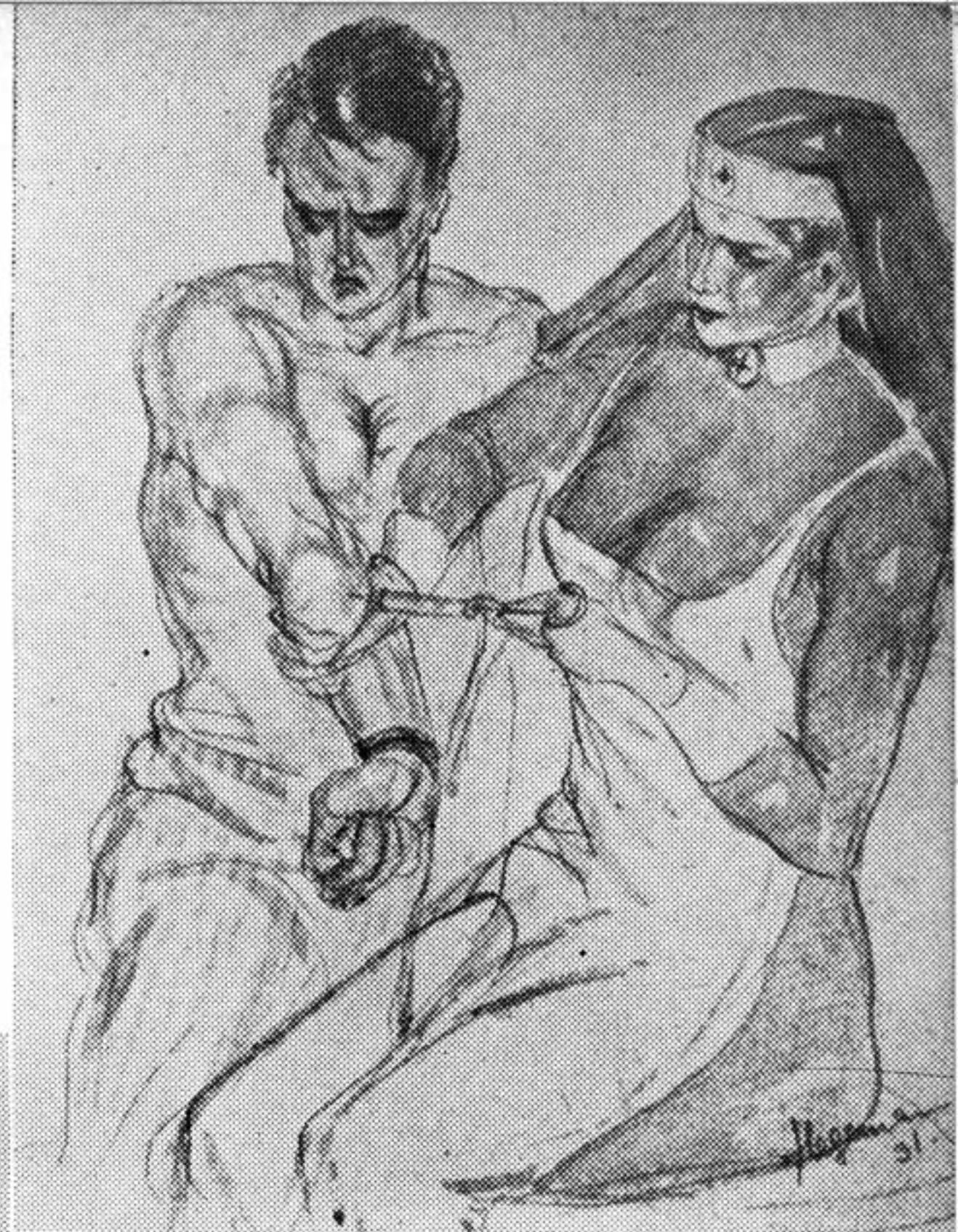


(右ページ) タンタラスのコップ (筆者不詳)

(上) 奇妙な見世物

(下) 女首切り役人 (ヘーゲマン筆)





(上) ヘーゲマン筆の「看護婦」
(下) パウル・カム筆の「鞭打」



(上) フランスのリール誌所載のマンガ。
(下) マゾッホの「毛皮のヴィナス」のさしえ(筆者不詳)

(上) ヒルシュフィールド
のウィーン性科学博物館所
蔵の男のマゾ・女のサド
(下) マゾの男の希望で写
したもの(一九五三年夏)

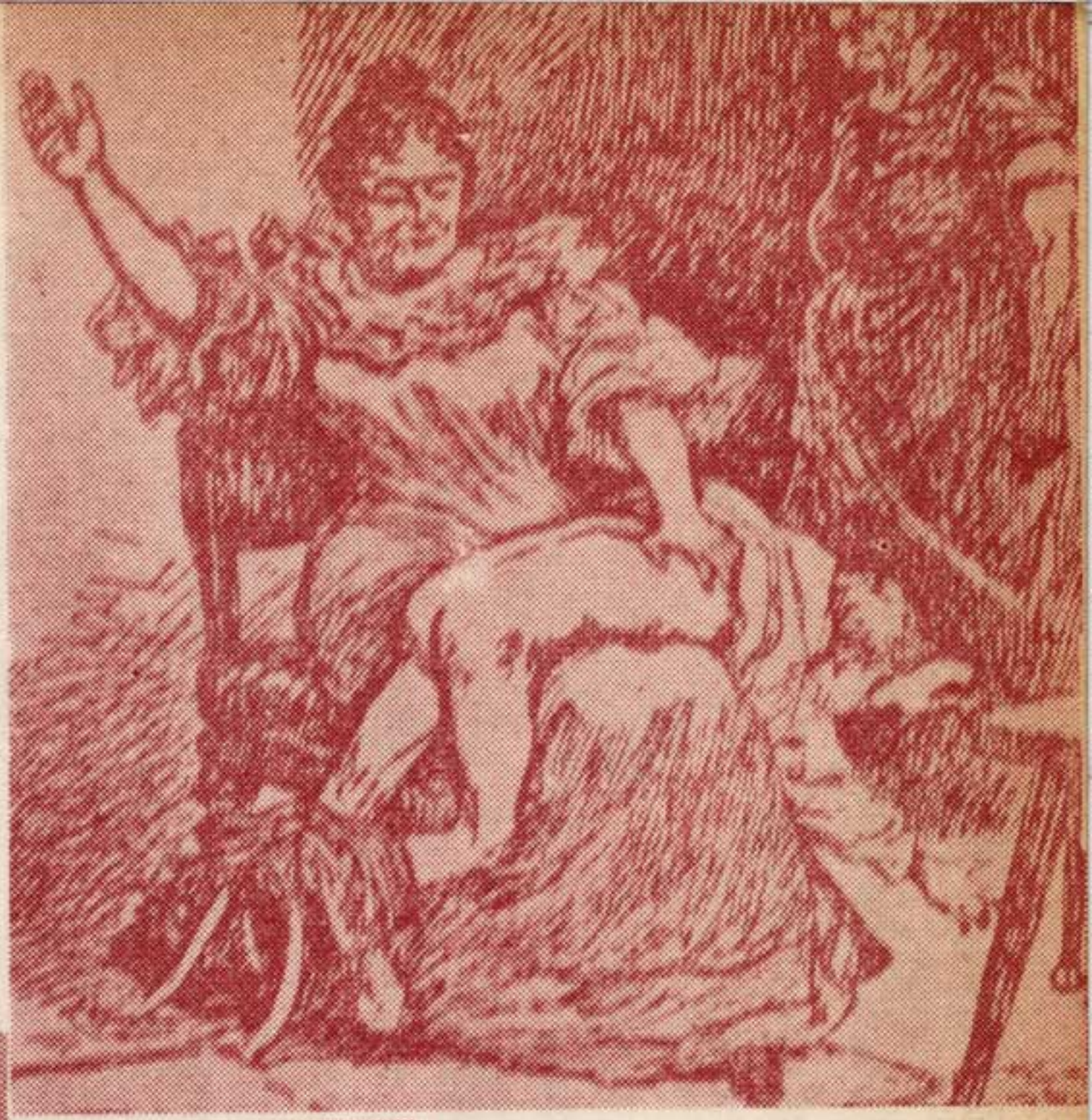


鞭打つ女性たち

イギリスの鞭打小説のさしえ（筆者不詳）



(右) イギリスの鞭打小説のさ
 しえ (筆者不詳)
 (下右) スペイン物のさしえ
 (下左) ヘーゲマン筆の「きび
 しい女教師」
 (左) ヘーゲマン筆「曲芸の調
 教」

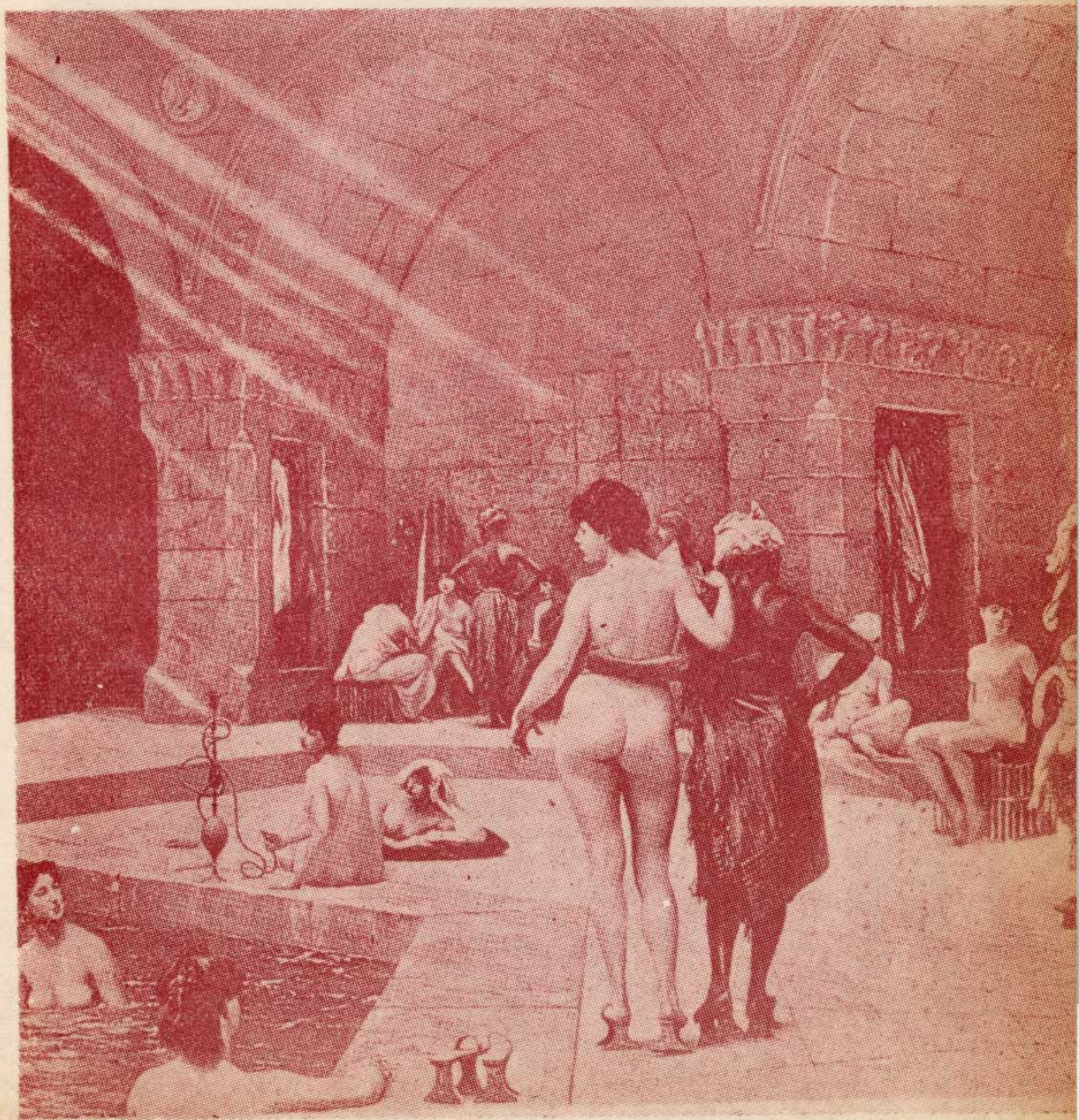


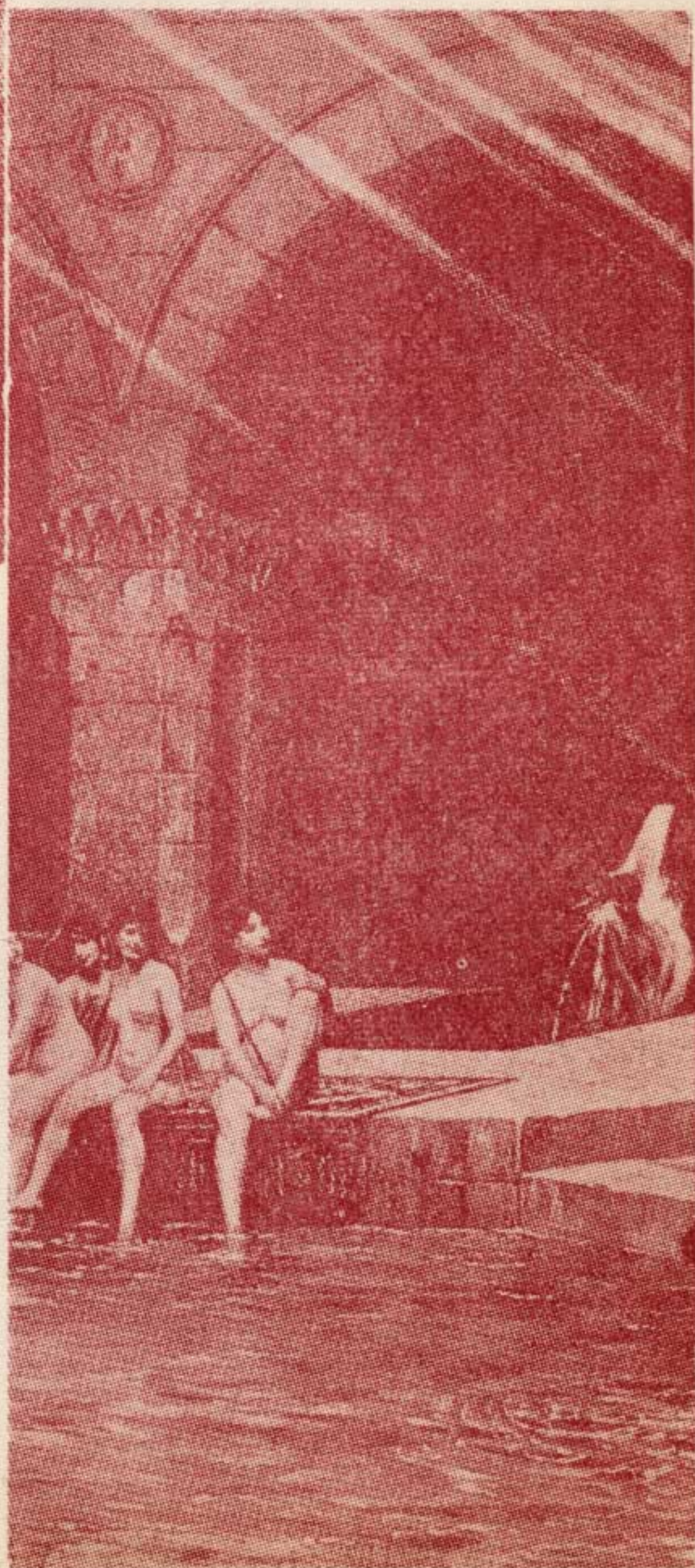
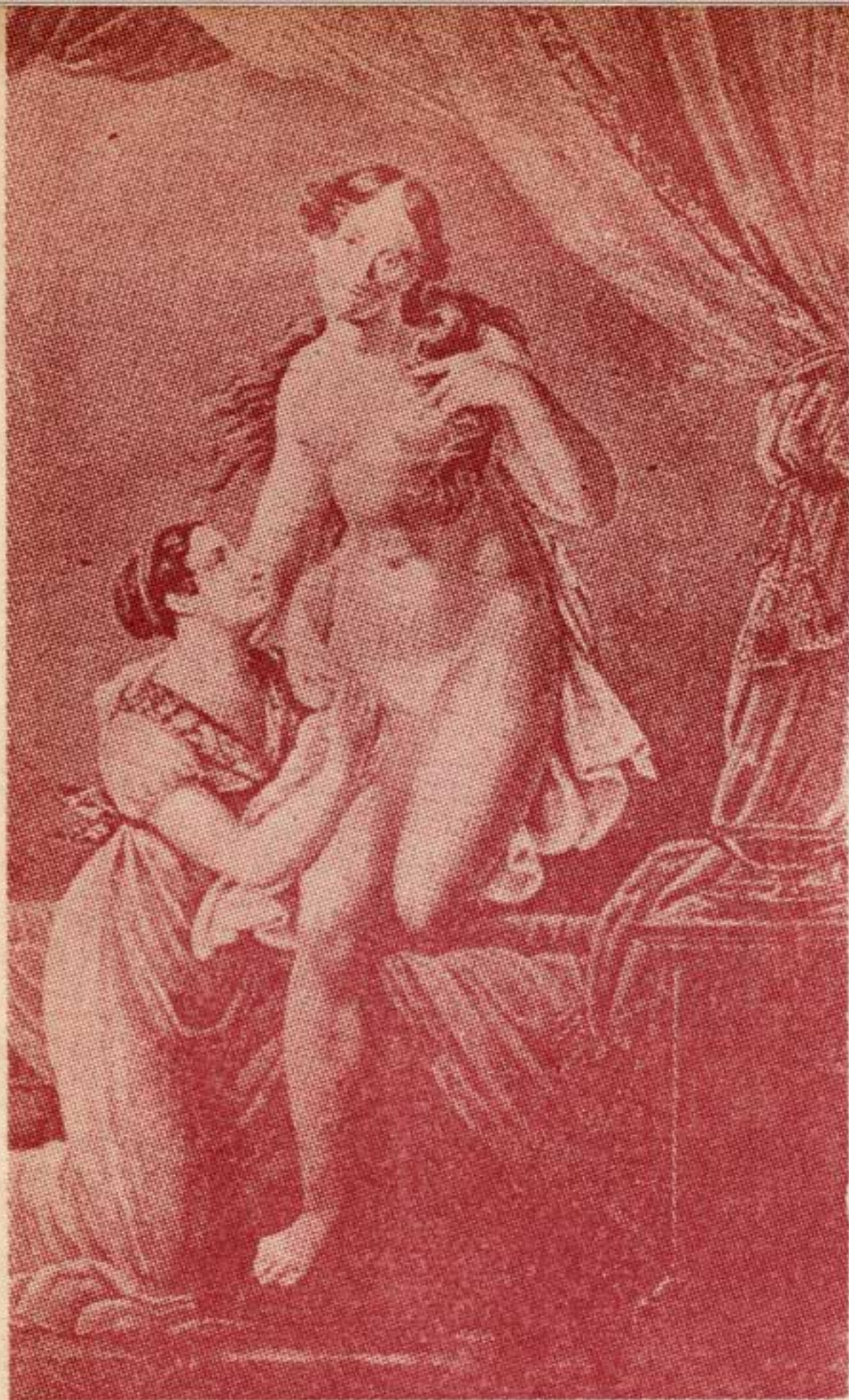




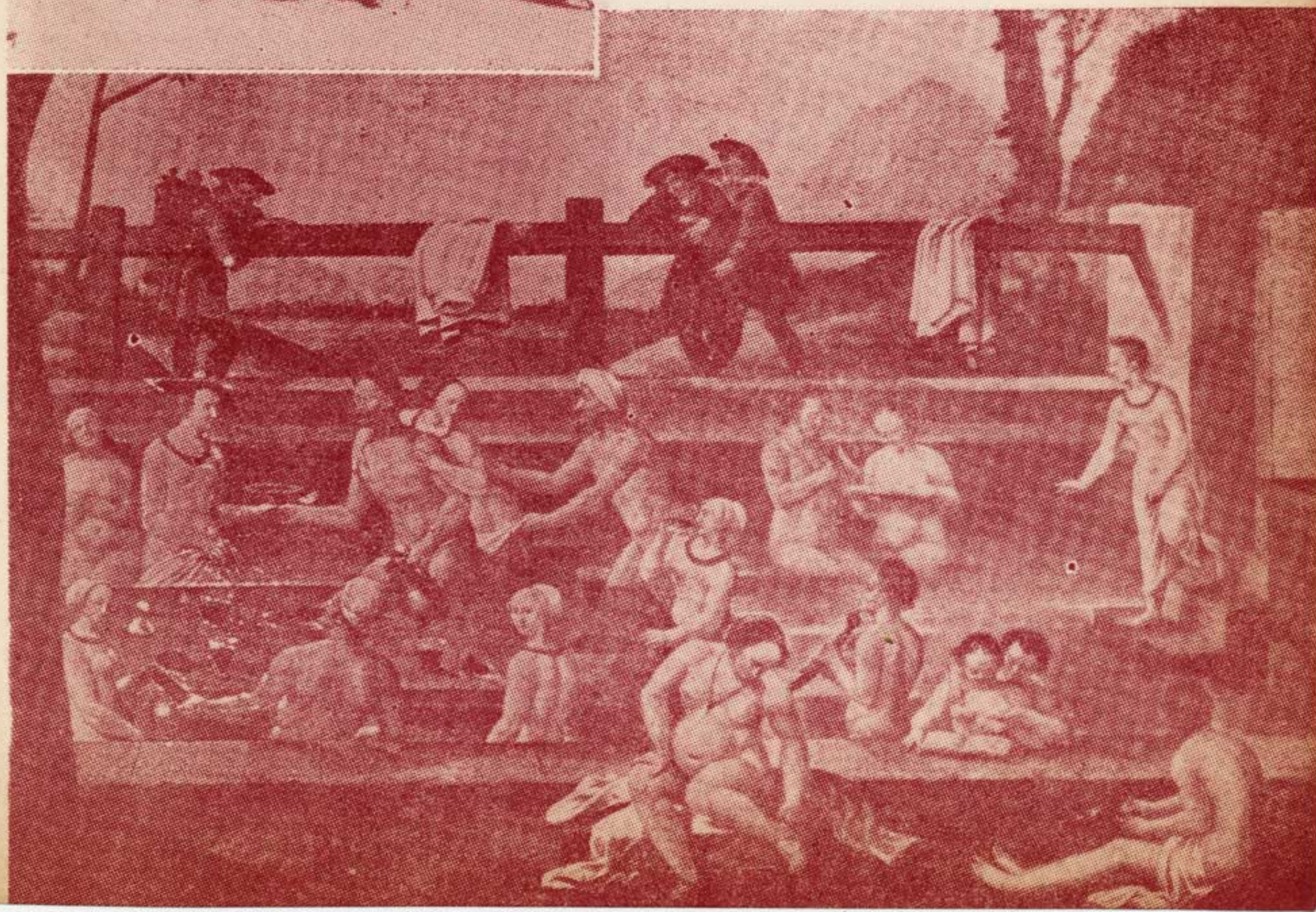
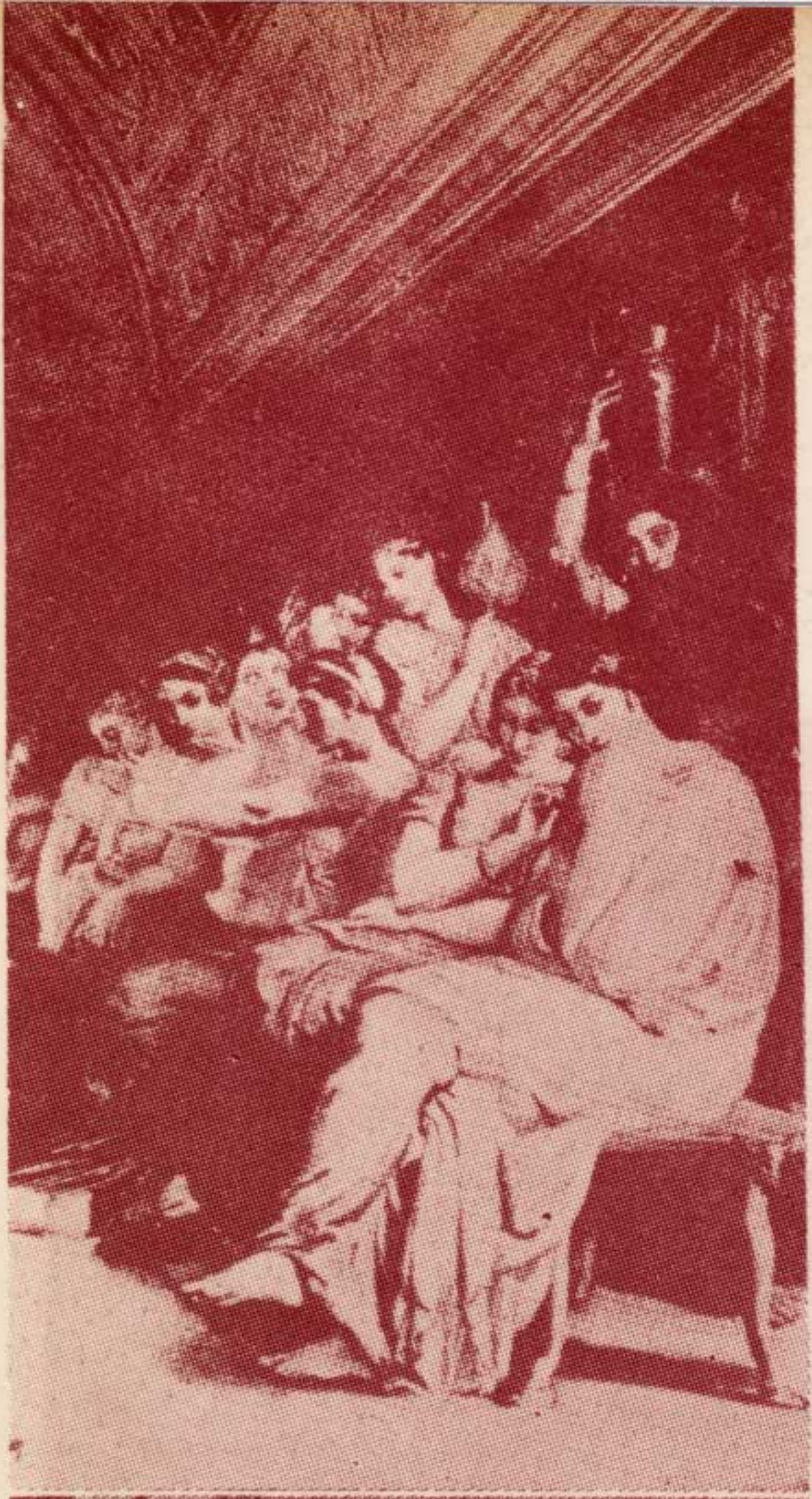


東西 快樂的な入浴風景



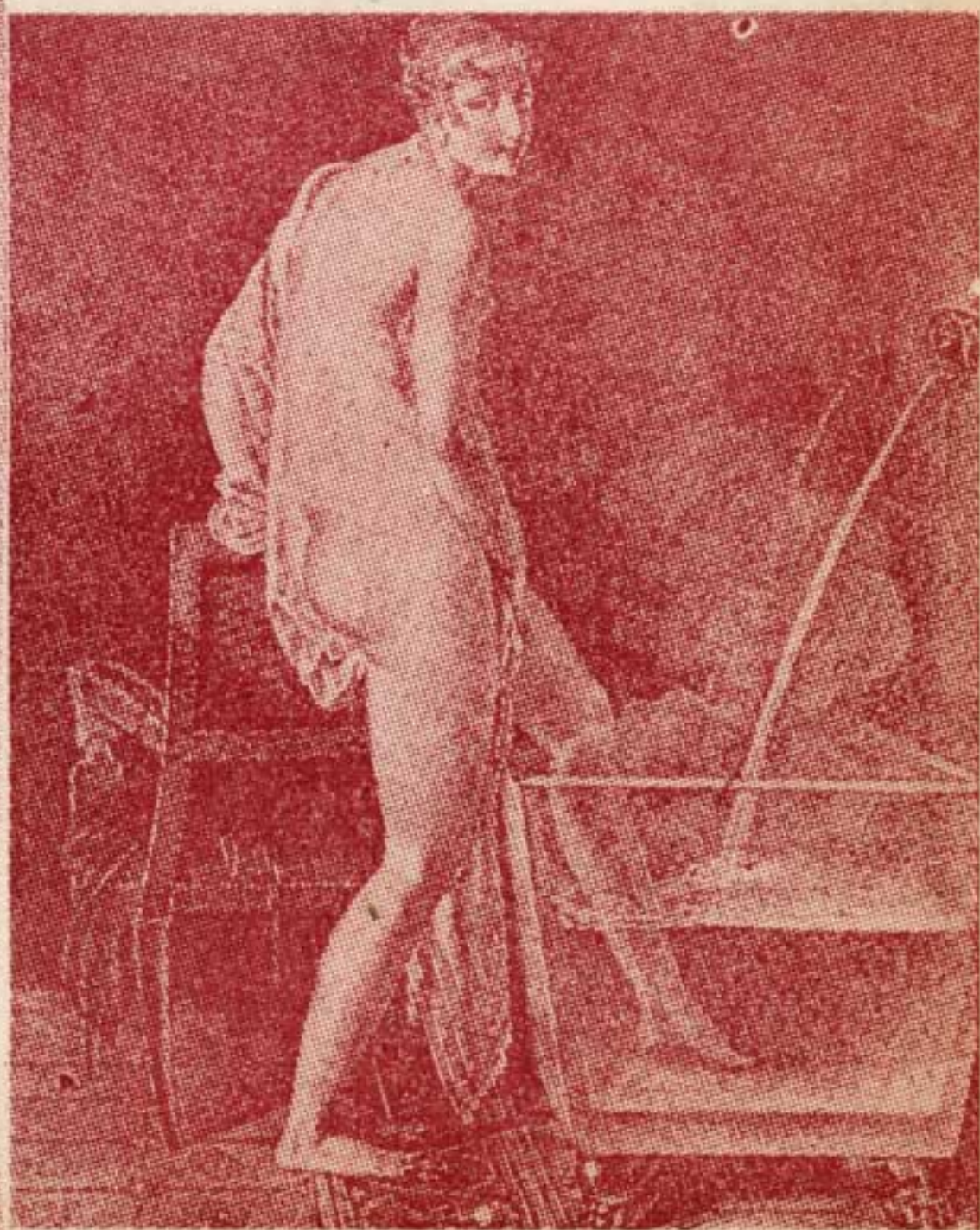
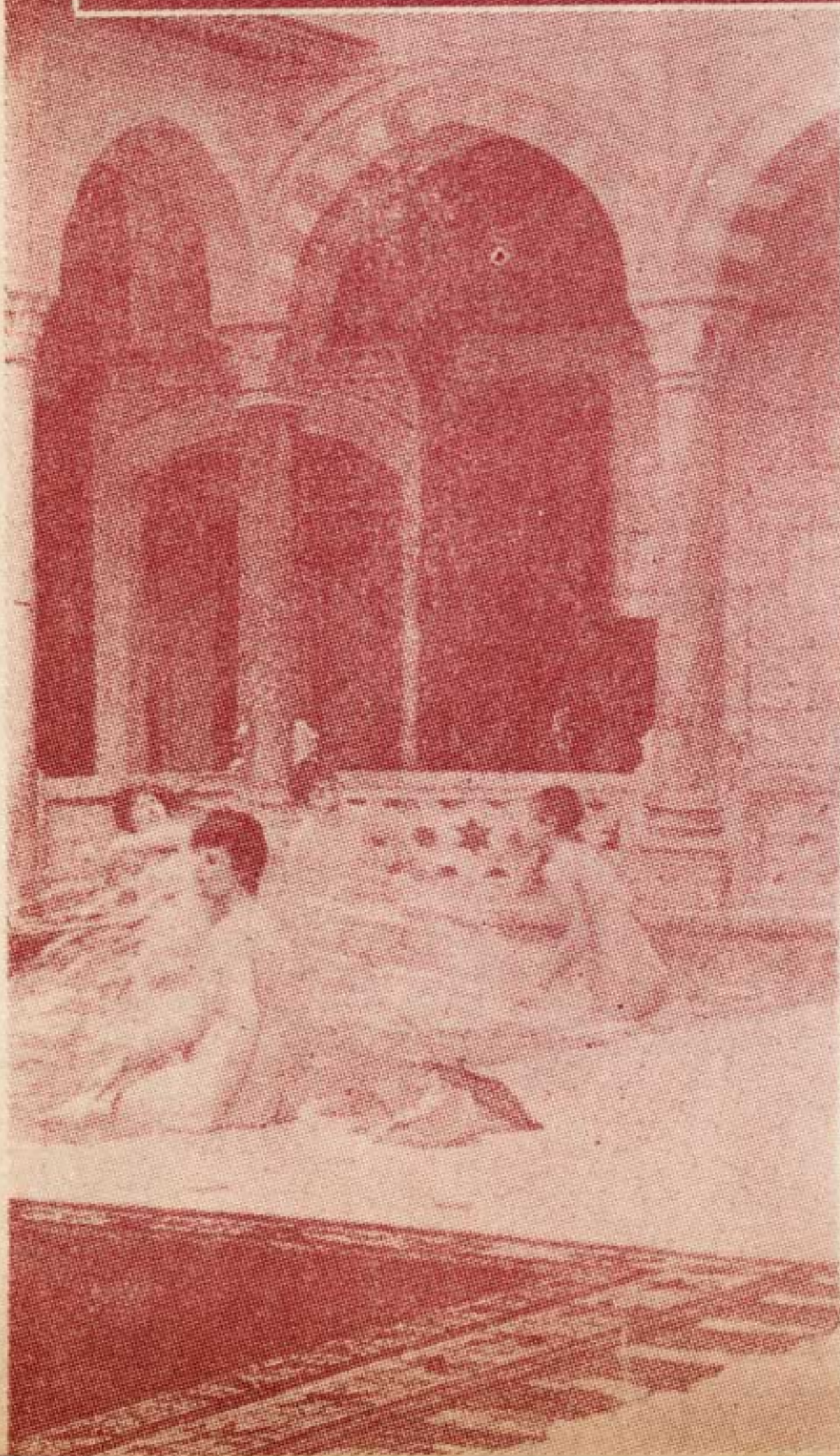


(右) 「ブラッサの大浴場」の壁画——
 女たちは、湯にひたり、コーヒーを飲み
 煙草をくゆらして、のんびりと一日を過
 ごす、小アジアの入浴風景(ジャン・レ
 オン・ゲローメ筆、一八七〇年)
 (上) 18世紀フランスの銅版画。浴槽に
 まで彫刻を施した豪華さがうかがえる。





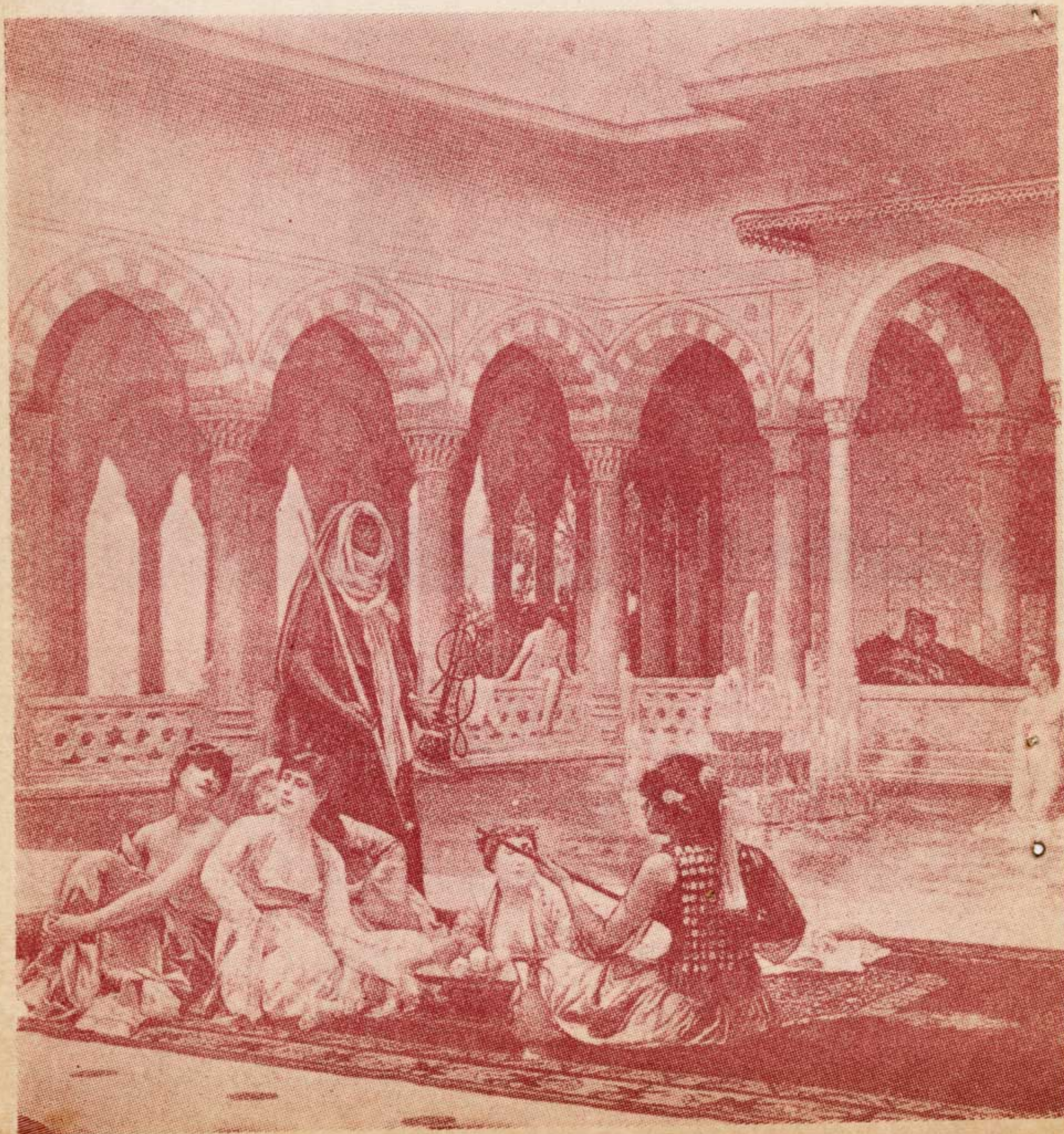
(右上) 17、18世紀ごろ、フランス
 で広く使われた木製深靴型の浴槽。
 (右下) 沐浴のよろこび (16世紀・
 ハンス・ボック筆)
 (上) ローマの浴婦たち。テピダリ
 ウムとよばれたテオドラ・チャセリ
 ユーの高弟たちによって描かれた。
 (右) ヴィクトリア王朝風の習慣、
 そのころは、入浴しながら朝食をと
 ったものである。



(下) トルコのハレムの女たち。パシヤの注視のうちに沐浴を楽しむ図。(ゲロメの傑作
「トルコのハレムのテラス」)

(右上) 入浴中のイギリス婦人。(アルフレ
ッド・スティブンス筆・1875年)

(右下) ナポレオン・ボナパルト時代に流行
した水晶風呂。(マレット筆・1810年)





(上) 鳥居清長筆の「湯殿」
 (下右) 鈴木春信筆の風呂場の美女だが、題はない。
 (下左) 勝川春章筆の風呂場の女。
 「会本色好乃式人」から。



(左上) 鳥居清満筆の「風呂場の母子」
 (左) ドイツの木版画で、16世紀の淫乐的な公衆浴場風景。右上の清長のものとは比べるとおもしろい



パウル・カムの名画 (右・ドミナ, 左・赤い悪魔)





ルドルフ・シュリヒテル筆の"ヴィナス"

変態クラ
ブ見学記

奇妙な体験

稲田勝造

「まったくびっくりしましたよ。なにしろ、わたしはまだ若かったし、いくら本で読んでいたとはいえ、そういう連中にぶつかったのは、生まれてはじめてのことでしたからね」と、煙草をくゆらしながら話しはじめたのは、産婦人科の医者としては盛業中、新聞や大衆雑誌の性科学読み物や身の上相談の解答などでジャーナリズム界にも名の通っている医学博士のO・S氏である。だから、これから以下の話は、そのO・S氏が語ってくれた実際の体験談である。

木立ちの中の一軒家

わたくしが、こちらの学校をでて、ドイツに留学したときのことですから、かれこれ二十年前のことです。専攻は医学でしたから、本場(?)のドイツへ行ったわけでした。

そのころはマルク(ドイツの通貨)が安かったから、同じ百円としても、内地で使うよ

りずっと使い、があつたので、いろんな本をあさりまし、また、遊びの金にも不自由しませんでした。

わたしは、よく、本屋に行きました。すぐ

本屋のおやじと懇意になって、珍しい本をとっておい、くれたものです。

その本屋のおやじが、あるとき、

「ちよつと風変わりなところがあるんですが



全裸に長靴のスタイルは、女のサディスト姿の最高という

ね、ひとつ、出かけてみませんか」

と誘われたのです。

しかも、風変わりって、どんなものなのか
きいても、本屋のおやじは笑っているだけで、
「まあ、行つてごらんになればわかりますし、
決して損はしませんよ」

というだけで、答えてくれません。

わたしは若いし、どうせ、ありきたりの淫
売宿とは趣きの違うところで、美女がうよう
よいるところだろうと見当をつけて、とにか
く連れていってもらふことにしました。

それは肌に夜風の暖かい晩春のある夜でし
た。世界のどこでも、一年中でいちばん悩ま
しい季節で、えたいの知れない興奮が、やは
り、わたしの胸の中で波たち、からだの奥で
もやもやした炎が燃えている感じでした。

案内されたのは、こんもりとした木立ちの
中に、一軒ポツンと建っている広荘な邸宅で
した。中世風のしっとりとした感じの建て物
で、キリの花のようなにおいが、夜気の中に
溶けこんで流れていました。

全裸で乗馬靴をはく女

わたしを案内してきた本屋のおやじが、入
口のドアをノックすると、のぞき窓から顔を

のぞかせた男が、何か問いかけました。本屋
のおやじも早口に答えると、サッとドアが開
かれました。あとで教わったのですが、会員
同士かどうかを確かめる合点のことだったそ
うです。

本屋のおやじは、勝手をよく知っているの
でしょう。わたしを連れて二階へ上がってい
きました。そして一つのドアの前に立って、
わたしをふりかえりました。

本屋のおやじのあとについて、一步ドアの
中に踏み込んで、わたしは思わず「アッ！」
と声をあげました。

そこは大広間で、ゴシック風の豪華なシャ
ンデリアに照らし出されていた光景は、わた
しの予想を全くくつがえすものだったからで
す。あいた口がふさがらないというのは、あ
のときのわたしの状態でしょう。しばらくポ
カンとつつ立っていました。

広間の中央は椅子もテーブルも片づけられ
てひろびろとしていて、周囲の壁にそって椅
子や小さなテーブルがあり、そこに大ぜいの
男たちが腰をかけていました。

そして中央では、いま、全裸の女性がひと
り、拍車をつけた長靴をはいただけの姿で、
手に乗馬用のムチをもって、妖しく立ってい

ました。まったく妖女といった雰囲気をもつ
た女でした。

するとまたひとり、同じように全裸で乗馬
靴の女性があらわれて、空間にムチをふるう
ではありませんか。

そして奇妙なことに、そんな女を見ている
壁にそった男たちのあいだに、あきらかに動
揺が起こりました。それも、奇異というので
はなく、切なく、やるせない溜息さえもらす
一種の興奮状態が、徐々にひろがっていった
ではありませんか。

わたしは、まだはっきり事態をつかみきれ
ず、ほかの男と同じように、部屋の隅の隅の椅
子に腰をおろしたのですが、ちょっと戸惑っ
た感じでした。

「マゾの男たちのクラブなんだよ」
本屋のおやじが、わたしの耳にささやいて
くれたとき、わたしはやっと、目の前の現実
を理解した思いでした。

拍車で蹴られる流血

やがて、壁ぎわの男たちのあいだのざわめ
きが高まったと思うと、その中から一人の男
が、着ているものをかなぐりすてて、中央の
女のところへ飛んでいきました。何人かがそ

れにつづきました。

最初に飛び出した男は、女の前に行くと、四つん這いになって、じっと女の顔を見上げました。

女は、しばらく見下ろしていましたが、いきなりムチをふるうと、その男の背中に打ちおろしました。

ピシッ！

甲高い音が広間いっぱいに広がりました。男の背中に、見る見る、赤い一条のすじが走りました。つづいて第二打、第三打がつづきました。

だが奇妙なことに、男は苦痛の呻き声をぐつとこらえながら、その顔面には喜色をあふ

れさせています。

わたしは、頭の中にある知識を実際に確かめた思いで、じっと見ていました。にぎったこぶしに汗がにじみ出ていました。

わたしが、中央の男と女に氣をとられていくうちに、いつの間にか、大ぜいの女たちが、いずれも全裸に乗馬靴だけのスタイルで、手にムチをもって表われていました。その女たちが、それぞれ一人ずつ、中には二人の、男たちを足下にふまえて、ムチを鳴らしはじめました。

広間は一瞬にして、異様な光景に満たされました。男の肌にもチをふるう女、男の背中に馬乗りになっている女、女の靴に接吻する男……、etc。中には、女の拍車で尻の肉を切り裂かれ、血にまみれている男。

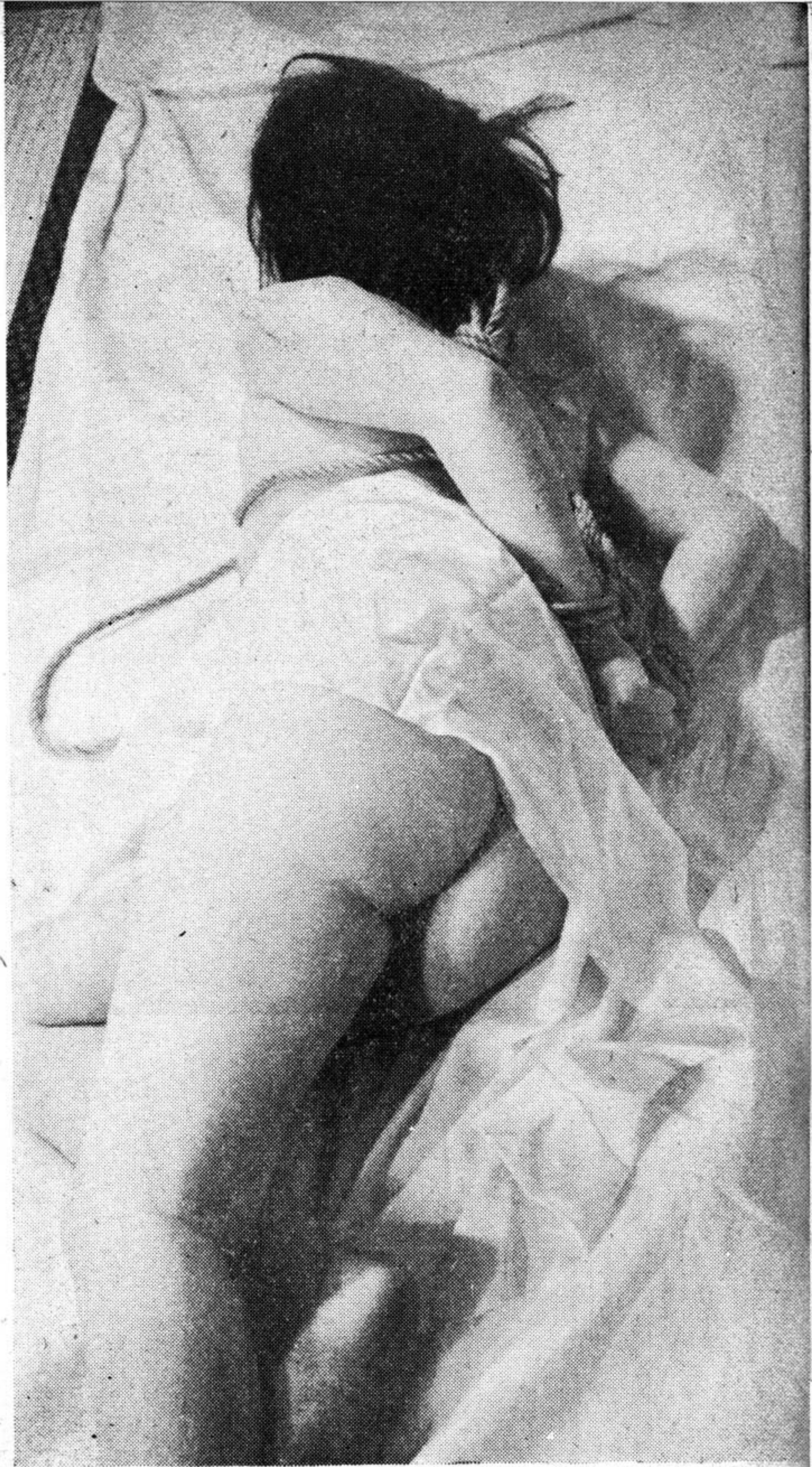
それはまったく、わたしにとっては、この世の地獄絵図でしたが、その場の空気は、喜悦と陶酔と興奮の渦巻く生ぐさい雰囲気でしたが、そこにひしめく男女の群れは、みな歓喜にひたりきっている様子です。

わたしは、ひとり、そっと、その家をぬけ出して、暗闇の中に歩きだしました。冷たい夜気が、頬に快かったのを、今でもハッキリ覚えています。



ケダモノの夜

奥台茂春



久美は、あの夜のことを知っていた。――

東京の浅草今戸で、手広く皮革商を営んでいる安西弁吉（61歳）宅に、妻みよ（33歳）の妹として、家事見習いをしていたころだ。

久美の姉みよは、弁吉の五人目の妻として迎えられて一年たったそのころ、結婚する前は久美と同じように美しく女盛りのみよが、どうしたわけか、原因不明の熱病で床にふしてしまった。

久美は、それこそ献身的に姉を看護したが、いっこう回復のきざしもない。そこに何か、隠された秘密、暗い影があるように思えてしかたなかった。それは次のようなことがあるからだ。夕方になると、毎日、みよは、少し元気がでてきて口もきけるようになり、久美を相手にたのしそうなものだったが、それも午後十時になると、久美はどんなことがあっても、みよの部屋から戻らねばならなかった。脂ぎった酒くさい弁吉が、久美を追い立てるのだ。

まさか、病気の姉を相手に一晩中、弁吉が責めたてているとは少しも考えなかったが……あの夜の一週間ほど前、久美は、廊下を這う

ようにして必死に逃げようとするみねの髪をムンズとつかんで自室に引きずりこむ弁吉をみてからは、ただごとでない夜のひめごに恐怖を感じるようになった。

その翌日、久美は、いつものように、みねの部屋に行った。しかし、中からカギをかけてあるのか、開かなかった。

「お姉さん、どうかなさって？」

久美は不安なおももちで耳をそばだてた。

「そんなところで何をしているんだ」

久美は、肩に手をふれた弁吉に、一瞬、息の根の止まるようなショックをうけて、すくんだ。

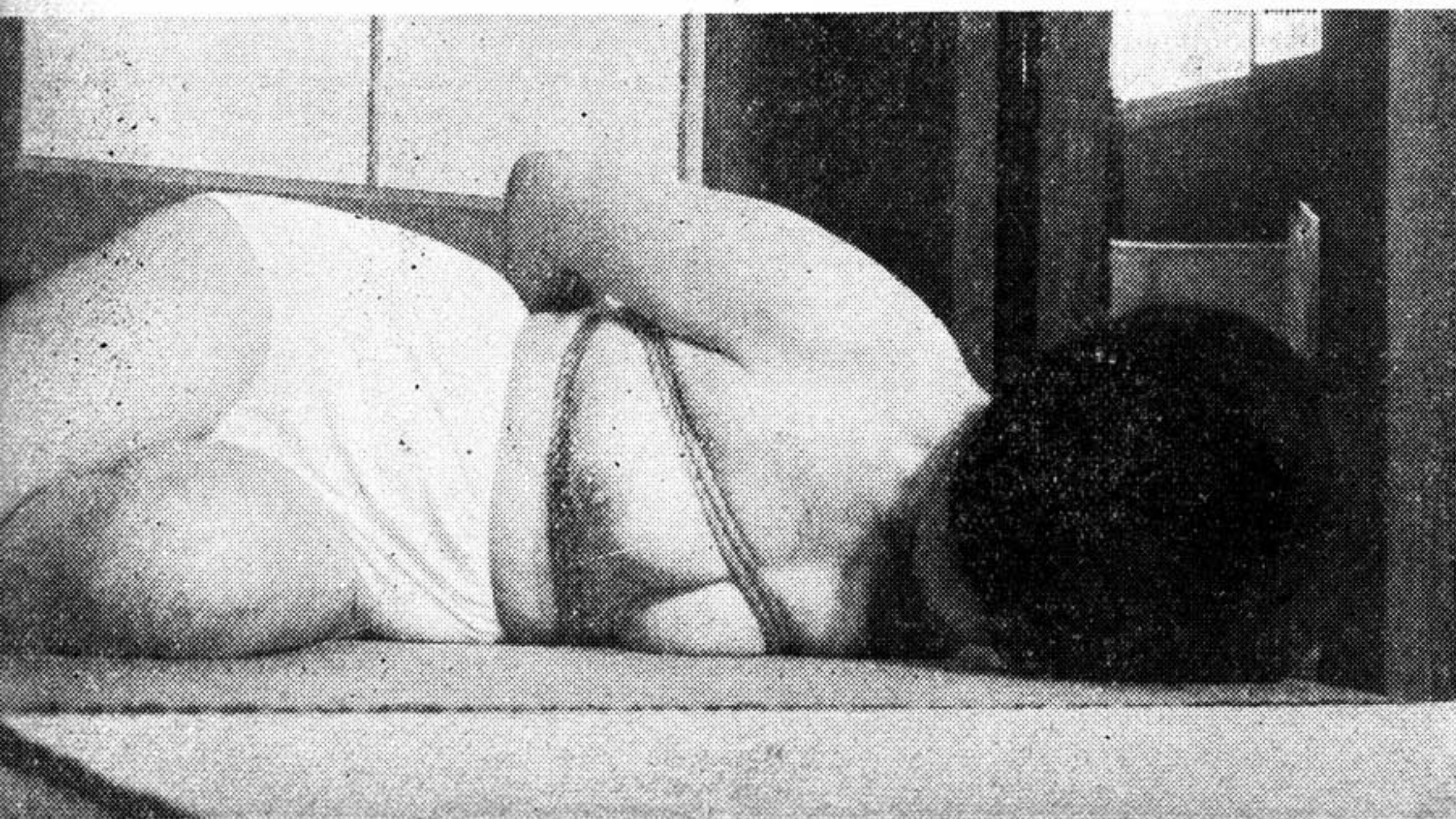
「みねは、もう長いことないな。弱い女を女房にすると、やりきれんわい。なあ久美」

久美は、声をたてられずに、ただ弁吉の胸の中でふるえていた。

「久美は、みねとちがって丈夫だし、わしの望みもかなえてくれそうだ。おい、久美、くるんだ」

白昼、しかも店の者がおそろく目に止めていたであろう、そんなときなので、久美は必死になって弁吉に抵抗した。

「みねはもう死ぬ。お前がわしの妻になる。いいか、わしは、ふつうの男のようなわけに





抱いていた。

弱々しいみねのうめき声が、いくども、女のいのちをかなでていた。

「姉さんも姉さんだわ。あのからだで応じるなんて」

すでに弁吉に犯された久美は、さて目の前に二人の痴態をみせつけられると、やはり、

久美は、弁吉の奇妙な仕草を、いぶかる気

持ちで、じっとみつめた。弁吉は一、二度みねをゆすった。熱睡したのをみとどける。と一瞬、みねのからだに馬乗りになった弁吉の右手があがり、発止とみねのみぞおちにこぶしが鳴った。

「ムーッ」

鋭い、そして短い、みねのうめく声が、ピリピリとあたりをふるわした。

二度、三度、みねは上体を起こそうとするらしかったが、すぐ弁吉の両手で押えつけられた。

ぬれた和紙は、完全にみねの鼻と口をふさいでいた。

ゆっくりと死のけいれんが、みねのからだをおそった。その姿に弁吉は、満足げに立ち上がった。

久美はヘタヘタと廊下にすわりこんだ。

「誰だっ？」

全裸の弁吉が飛び出して来て、久美をひきずりこみ、うむをいわさず犯した。

「心臓マヒでみねは死んだんだぞ、いいか」
久美はわけもなく、ただ生きたいことだけで、弁吉にいくともうなずいた。

はいかないが、それだけのことは、お前が生きている間してやる。わかったな」

久美は、犯された激痛と悲しみに、そんな弁吉の言葉を耳にしながら、気を失った。

二

その夜だ。

久美は、ひとめ姉のみねに会いたくて、深夜、そっと部屋を抜け出した。みねの部屋は真っ赤な色の電灯がついて、まるで部屋中が火のようだった。

弁吉は、久美がのぞき見しているのを知らずに、豚のように肥満したからだで、みねを

みねが憎かった。

ぐったりとしたみねのからだを仰向けにすると、弁吉は、丹念にタオルで汗ばんだところどころをふきはじめた。

やがて、久美は戦慄する一瞬をまざまざとみたのである。弁吉は、たたんだ和紙を一枚タンスの引出しから取り出すと、赤い電灯に裏表というようにスカしてみた。そして、それを枕元の洗面器に入れて濡らし、しずかに水気を切った。

その和紙がみねの顔にぴたりとあてられ、すきまのないくらいにおかれた。
まるでデスマスクをとるようだった。

三

死因は、弁吉の言ったように、心臓マヒとして葬られた。まもなく久美は、六人目の弁吉の妻になった。

弁吉の性欲は、健康そのものののように丸々とふとっていたみねがしばらくの間にげっそりとしたように、異常だった。久美もすぐ、その恐ろしさを思い知らされた。

首から下を、乳房と下腹部だけを露出させたまま、真新しい麻ナワで強く縛りあげ、久美が息苦しくなると、弁吉は面白そうに、久美を抱き上げた。

弁吉は、今までのどの女よりも久美にひか

れた。一月に一度、久美を連れて旅行することもあった。

その旅行の奇妙な最後の日、弁吉は久美を伴って熱海^{あたま}に行った。

ところが、久美は、熱海の旅館に着いた夜、中毒症状を呈して、ものすごい下痢を起こした。弁吉は、そんな久美をいまいましげにみやり、ドテラ姿のまま、ぶいと夜の町に飛び出していった。

さすがに熱海は、歓楽という名の無法地帯にひとしい。赤線のなくなったはずの糸川べりは、以前と少しも変わらぬ女出入りだし、加えてエロ・ショウ、パンマ、アイマイ屋など、かえって、その種の女はふえているよう



だった。

弁吉は、自分の縛りと、責めに耐えられそ
うな女を求めて歩いた。

恰幅かつぱくのいい弁吉をみて、女たちはしつこく
言いよった。

「痛い目にあってもよければ、こい」

まさかという顔で女は、ニヤリと笑う。

「そんなにいい目にあうんだったら、よろこ
んでお伴するわよ」

弁吉はふところからチラリと麻ナワを女に
みせる。

「へええ、あんたって、いけすかないエロ爺
だよ」

女は一樣に、弁吉の誘いに逃げ足となる。

「ダンナ、グルグルずいぶん歩いたんでしょ。

この辺であたしにまかせてくださいよ」

因業いんごうな女衞めいじんのにおいのプンプンするメスの

老豚が一匹、これまた老豚の弁吉に尻をふっ

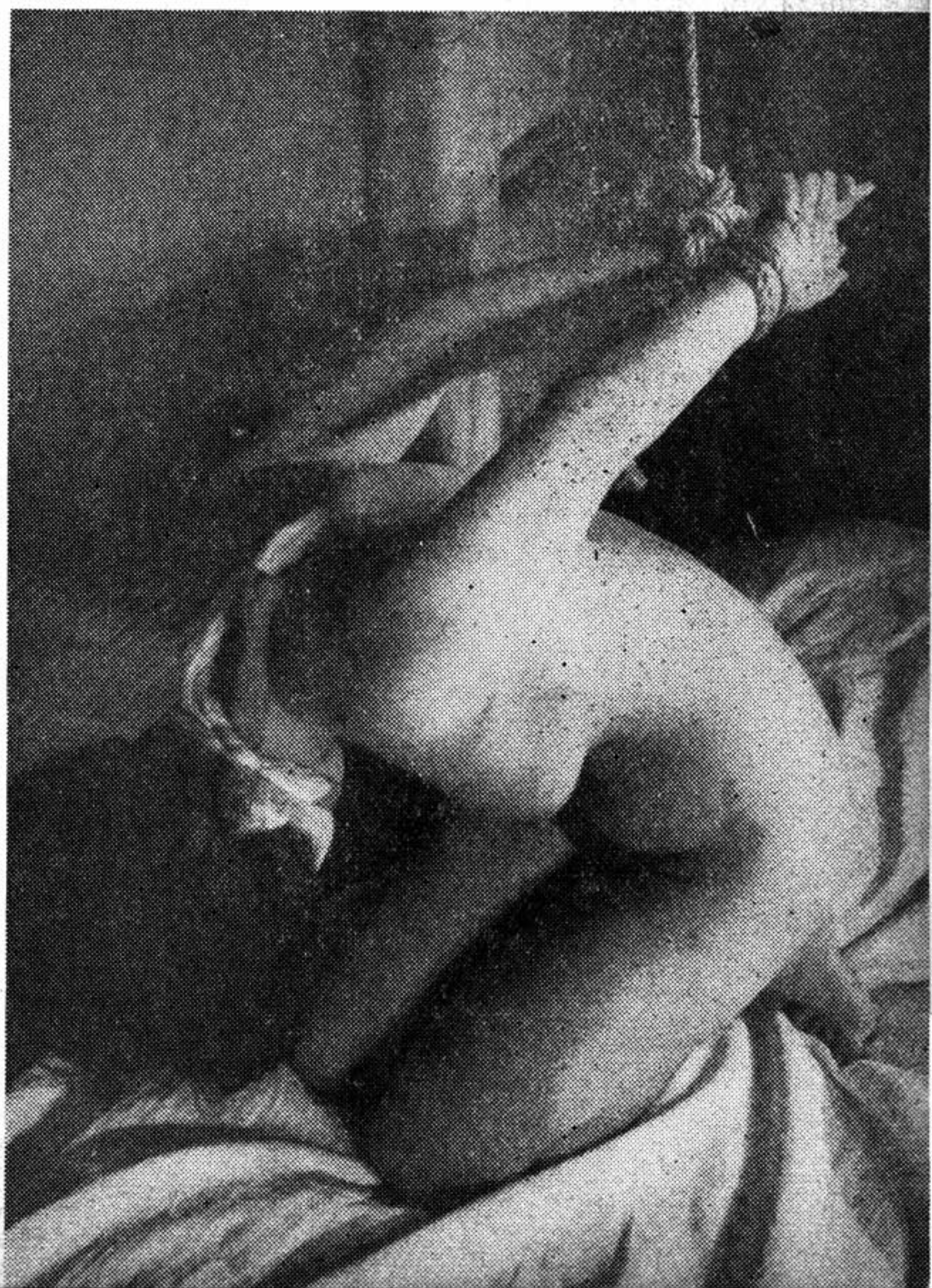
てついて来た。

「まかせられるかな」

弁吉は右手に麻ナワをもち、女の前にさし
出した。

「これで女の子を縛って、痛い目にあわすん
ですかア」

「どうだ。これでもいるかな」



女はジロリと弁吉の頭のとっぺんから、グ
ロテスクな腹の突き出し、それから爪先と様
子をうかがい、ポンと手を打った。

「ダンナ。ナワもいいけど、そのまんま殺さ
ないでくださいよ」

「いるのか」

女はおうようにうなずいた。

「若い女でしてね。この女なら、その気があ
るからうけあいますよ」
糸川べりを山のほうに向かって、二人は歩
き出した。

四

「スラっとはいってくださいよ」

だいぶ登りかけた道の両側は、まばらな商店が立ちならび、女が招き入れた家は、もとのつくりそのままの小料理屋風。同じように



下駄が十一足、きちんと土間におかれていた。女は、二階へ登る階段の下から、女の名をよんだ。

「かねさん。ちょっと降りて来てくれないか」

弁吉は、降りて来た女をみると、どうやら団体客の事務員風の若い娘、下腹を片手で押え、歩きにくそうにチラリと弁吉をみて顔を伏せた。追いかけるように、そのすぐ後ろから、ドテラ姿の若い男が降りて来た。

「ダメじゃないか、途中で帰るなんて」

娘は、男の声に押されでもしたようにつまずき、そのままかがみこんでしまった。

「ひどいわ。ひどいわよ、あなたって……」

妙にうわずった娘の声に、弁吉は年甲斐もなく強烈な色気にとまどいした。

「いや、いやよ、もう、帰るわ」

男の手にひかれながら娘は、やっとのことで歩き出した。

「娘をくどくなら、

ここはテキメンですよ。ダンナ」

女はまた、「おかねさん」とよんだ。

弁吉は、階段の下で、二階で行なわれ

ているエロ・ショウに聞き耳をたてた。

あえぐように、「クック、ク、ク」と、さそいかける女の声が聞こえてくる。

ピシッ、弁吉は、ハッとして、もう一度階段下にちかづいた。

ピシッ、ピシッ！

「おうッ、あッ、ウッ、ウッ」

鋭い風を切り、肌にめりこむような快い音と同時に、打たれる女が悲鳴をあげる。

「ダンナ、いま叩かれている娘なら、どうです？」

弁吉は、高い金を払って二階に上がってみる必要はなかった。

女の呻き声や、もだえて畳に爪をたてるあの音さえ聞こえれば、それでじゅうぶん満足だった。

「話がついたらク久松々によこしてくれ」

「すみませんねえ……こんなにいただいて」

メス豚は、弁吉を戸口まで送りながら、

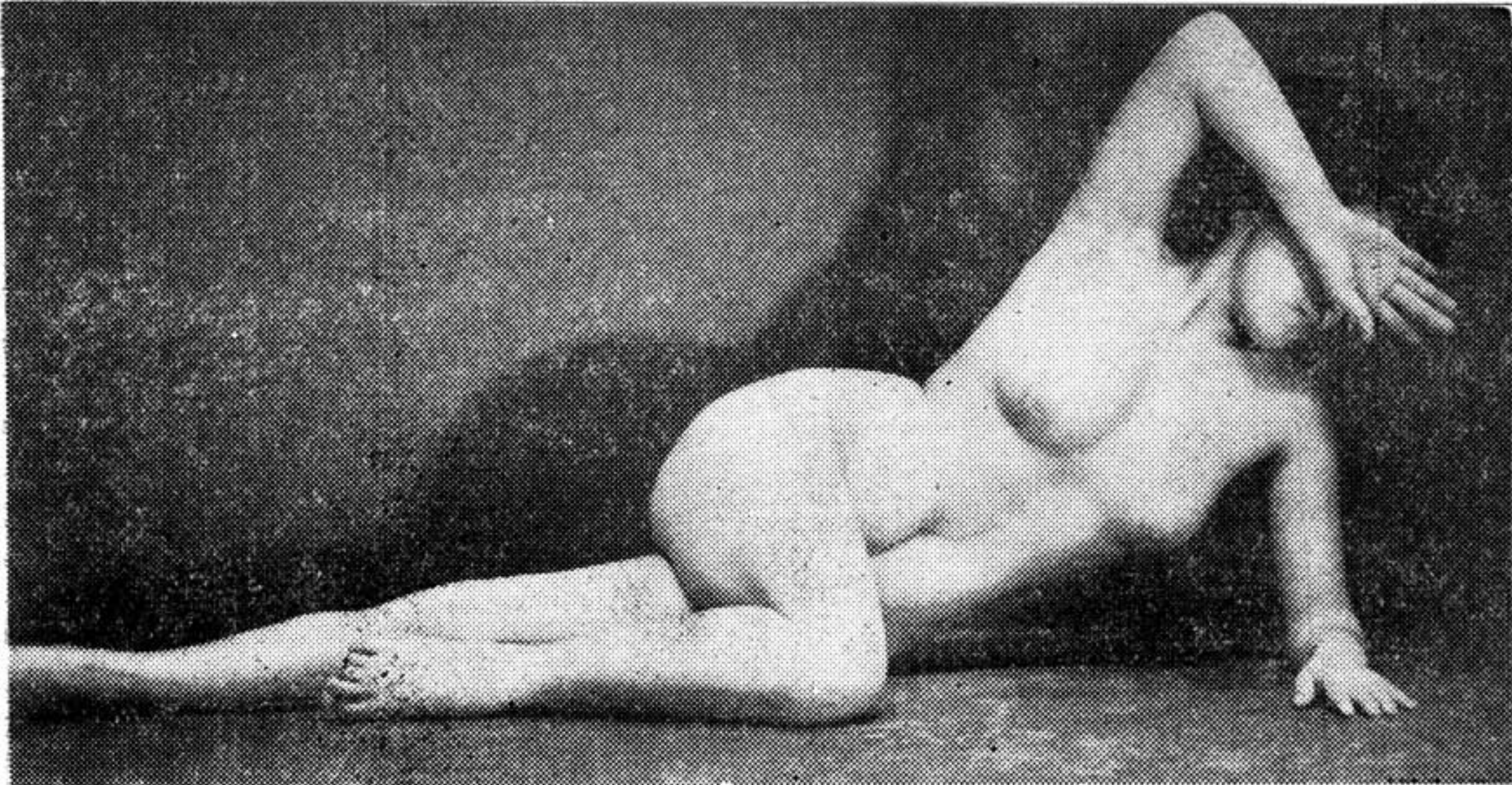
「あたしだって女ですよ。ダンナ」

と、小声でしゃべると、ペロリと赤い舌を出した。

五

一時間ほどたって、若い女が、スリッケー





スをさげ、ふくらんだ乳房を申しわけ程度にかくしたサマードレスを着て「久松」にやって来た。

思ったより上玉だ。弁吉は、どこかでみたことのある顔だと思った。

「あら、おつれさんがいるの？」

女は、久美が床についているのを見ると、立ち止まった。

「いいんだよ。家内もわしと同じ趣味さ」

弁吉は、女を抱いてかるく接吻した。

女は、手ぎわよく裸になった。

「これはどうするの？」

パンティーはすでに、ひざの下まで落ちていた。

「奥さん。あんまりみないでね、あたしは女にヨワイのよ」

女は、縛られるとき、ちょっとしたことに痛がったり、苦しんだり、さも死にそうに声をはりあげた。

久美は、みるからに大げさな女の仕草に、イライラして寝つかれなかった。

弁吉は、芝居じみた女に腹を立てて、髪をひっぱると、タバコの火を乳首に近寄せた。

「あーあッ、アツイッ、おうッーッ」
本番の序の口だ。

女は、弁吉の責めに、殺気じみた恐ろしさを感じとって慄然とした。

「殺さないでッ、殺さないでッ」

女の声は、たちまち、サルぐつわで封じられた。

六

「あなたッ。その女を、あたしの目の前で殺してッ」

久美は、下痢でつかれたからだを起こし、なぶられている女を前に、弁吉に言った。

「イヒッヒ、ヒ、ヒ」

弁吉は、真顔になって命令する久美に、縛りあげた女をほうり出して、抱きついた。

「久美、お前もやっと本モノだ。わしの思った通り、恐ろしい女になった。よしッ、お前の言う通り、この女を、目の前で殺してやろう。何がいい。このロープでくびり殺すか。それとも、このナイフで腹をひき裂くか、言ってみろ。わしはお前のドレイだよ」

女は、二人の異常な興奮に、畳の上をころ

げまわった。

「あなた。あの紙でやりましょうよ。あれなら、死んでも殺人にならないわ」

弁吉は、そう言いかける久美の下半身にひろがった悪臭にみもだえした久美の腰に顔をよせた。

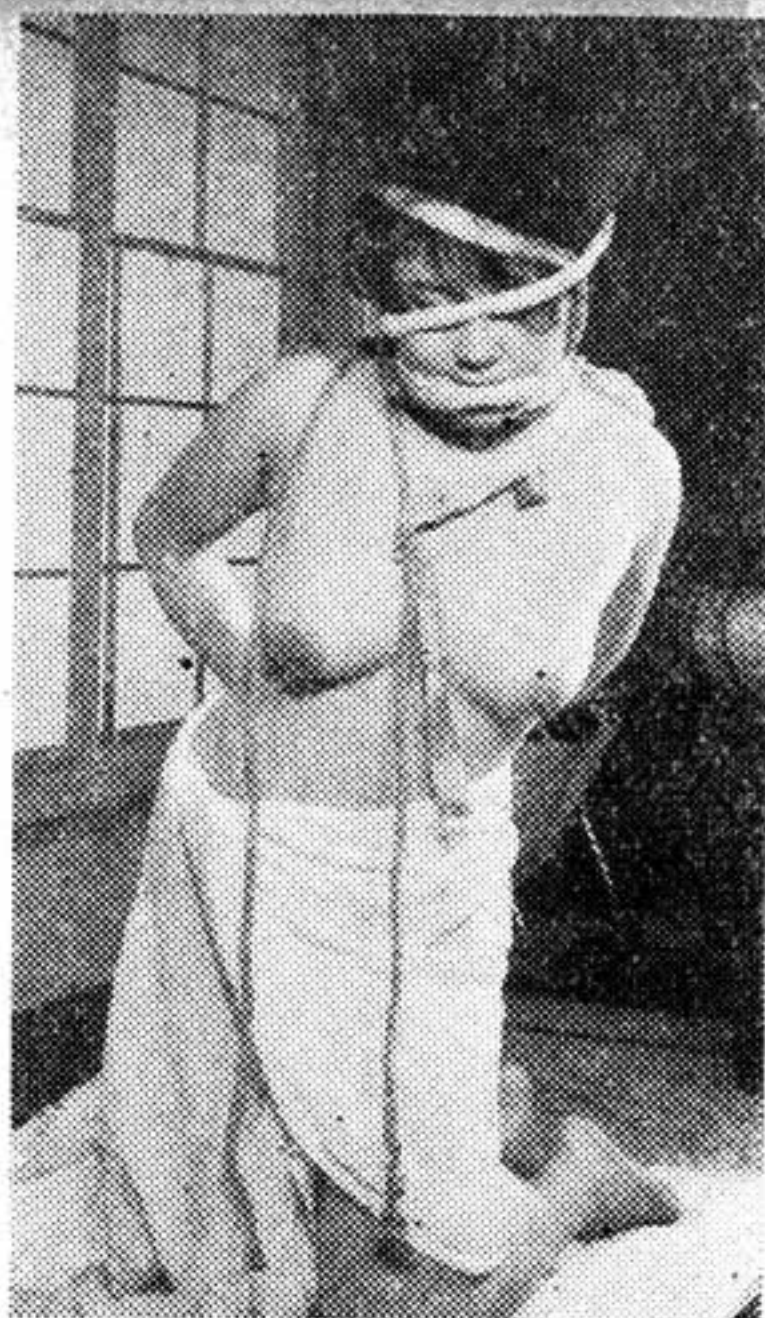
「そうだと。今度も成功するさ」

立ち上がって、ポストンバッグに入れてあった和紙を取り出す弁吉に、久美は、黄金色にまみれた下半身を仰向けに、弁吉に向かってよびかけた。

「抱いてッ、早くッ」

ものにつかれたように、弁吉は、油汗を流して久美に挑んだ。

「ウッーッ」



突然、弁吉のからだ飛び上がって、後ろにひっくり返った。ガマ蛙が腹を天井に向けたようなグロテスクなさまは、ちょっと見られない光景だった。

久美は、すぐ立ち上がって、バス・ルームにかけこみ、汚水を落として戻った。

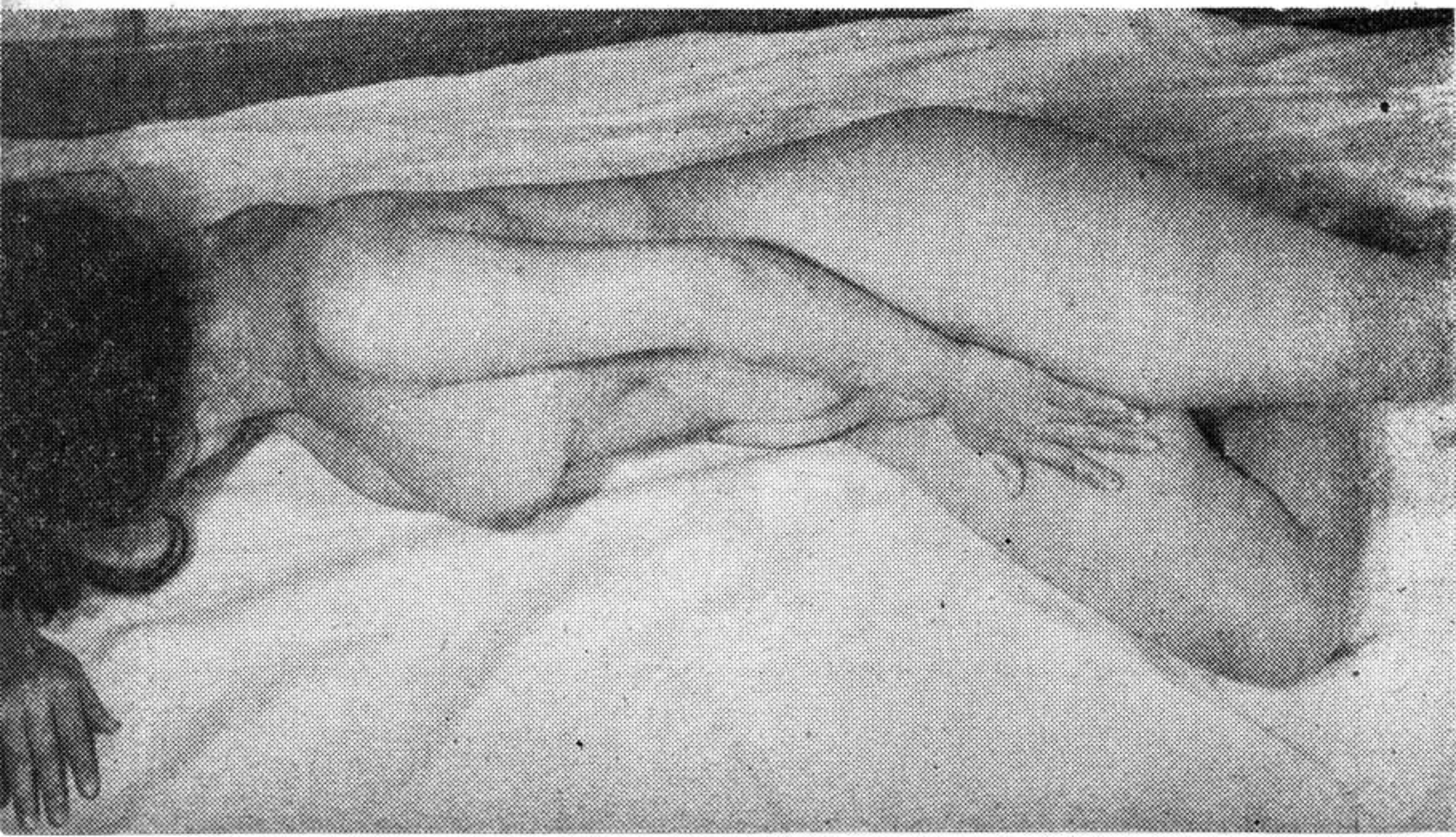
そして、ひややかな面持ちで、弁吉の前に立った。

口をパクパクしながら、もう吸いこむ力のない弁吉は、ただ、うつろな目を久美に向けている。

ヨダレが泡となって、音を立てている。

「死ぬのね、あなたにふさわしい立派なサイゴよ。あなたを殺すには、こうするより方法がなかったのよ。いつかあなたが、あたしのお腹の上で死ぬことを願っていたわ……死ぬといい。けだものッ、姉さんの敵……あなたは、もう死ぬわ。みるがいい。ゆっくりと、あなたの大好きな女をみるがいい。フッフ、もうみえないのね。目だけ大きくあいて、そう、もう一つ、二つ。フーッと息をして……あんたは死ぬわ」

久美は、狂病のようにつぶやくのだった。だが、なんといわれようと、弁吉の口からは、ことばが出なかった。



ハリウッド奇談

人食い虎の爪跡

映画の撮影進行中、虎が、若く美しい人氣女優を、その鋭い爪にかけ、やわらかい肉体を引き裂くという椿事が起こった。映画の都、美女の町ハリウッドでのことで、しかも、その「死の闘争」が細大もらずカメラにおさめられたというのだから、さすが話題の多いハリウッドでも、センセーショナルなトピックとなったのである。

その日、撮影は順調にすすんでいた。虎を登場させるシーンになった。

こういった場合に使われる虎（もちろん虎だけに限らず、どんな動物でもそうであるが）は、じゅうぶん調教されていて、脚本どおりに動かせるものである。だから、その日も、撮影は予定どおり、しかも順調にすすんでいた。

「破滅だ！ オレの足はなくなったし、尻の肉はどこへ行ったのだ」

こういうセリフがあって、次のカットに

移ったところで、虎の登場となった。

ところが、この虎の様子が、どうもおかしい。目の輝きもいつもと違って、野性をむき出しにしているのが感じられた。

調教士は、ハッとして、用心のために弾こめした銃を、いつでも向けられるように準備した。

そのときだった。アッというまもなく、かたわらにいた女優に虎が飛びかかった。

「キヤーーッ！」

「ウワーッ！」

女優の悲鳴と、周囲にいた人々のため息とも驚きともとれる呻き声が、同時にあがった。調教士は、銃をかまえたものの、一発で、急所を射とめなければならぬうちに、噛みつかれた女優に、当ててはいけな

いので、ウロウロしているだけだった。虎は、女優に噛みついたまま、鋭い爪をつきたてた。失心してしまったのだらう、

彼女は声もたてない。

見る見る、ドレスはビリビリに切り裂かれて、あらめのようなになる。ドレスとともに、白くやわらかい肉が、鋭い爪に切り裂かれて、血が噴きでる。

威嚇の銃声が、一発鳴った。

虎は、獲物を口から離し、太くたくましい前足でしっかりと踏んずけて、あたりをへいげいした。

ウオーッ！

獣の王者にふさわしい咆哮だ。

人々はすでに遠くへ逃げ去り、物かげに身をひそめて、こわごわのぞき見していた。

三人の調教士がライフル銃を構えて、一発必殺のチャンスをねらっている。

虎は、生肉の味を思い出したのか、流れる血をねぶり、また肉にくいついた。

三挺の銃が一せいに火を噴いたとき、もんどりうって虎は倒れた。

あとでわかったのだが、カメラは非情にも、このときまで回りつづけていたのだ。

一塊の肉と化した女の死体が、見る人の目をそむけさせる凄惨の気を、静寂の空気の中にひろげていった。

八佐藤 仁



アメリカ開拓史の一挿話

女郎屋の女主人

一八九六年、ニュー・オルレアンの参事会委員シドニー・ストーリーは、市会にある特定の区域に限りて売春を公認することを提案した。特定の区域というのは、キヤナル街の両側三十八ブロックということで、議案は通過した。

そのため、この一部はストリー村とよばれることになったが、そこは、最も野蛮で、最もみだらで、最もきたない、だが最も活発な町、つまり麻薬とセックスと酒の町となってしまうたので、史上に悪名をのこすことになった。

そこには二百軒の女郎屋があり、一ブロック二六三人の女たちがいた。また、パーティーやダンスのために十五のホールがあった。その中で一番有名なのはチン・タイプ・ホールであったが、このホールは、昼間のあいだは、前日に変死した死体公示所に使われていた。

そんな女郎屋のなかで、一番勢力をもっていたのがルル・ホワイトである。彼女は明るい肌をもつクリオール人で、輝く黒い髪、青い目の美人で、西インド諸島で一八八〇年ごろ生まれたらしい。というのは、女の年齢は、はっきり、自分で言わないのがふつうだからである。

ルル・ホワイトは、自分の店の装飾や調度品をマホガニーで飾り、マホガニー・ホールと名づけた。そして、生まれ故郷の西インド諸島をはじめ各地から、美しい女たちを集めた。

その女たちの中に、バーバドスから来たシェリア・ジャロンという若い女がいた。彼女をひと目見たときルルは、カチンと胸につかえる不安を感じた。というのは、シェリアが、ルルと同じように輝く肌を持ち主であるばかりか、青い目、黒い髪もそっくりで、しかもルルより美しかった。

ルルの不安は、やがて現実となって現われた。それはルルの隠れた情人を、シェリアに寝取られたからである。男がシェリアを誘惑したのであるが、ルルにとっては、そんなことはどうでもよかったのだ。とにかく、煮え湯を飲まされた二人が、憎くて憎くてたまらなかったのである。

ルルは、さっそく、屈強な召使い（そういう男が用心棒として、いつも一人や二人はいたのだ）を呼んで、シェリアと、自分の情人とを捕え、後ろ手にくくりあげさせた。

「あたしにさからうものが、どんな罰を受けるか、よく知っているはずだ。思いしらせてやる」

憎々しげに言い放ったルルは、男に命じて、身動きもできない二人のからだにムチを加えさせた。彼らが気絶してしまうまで。

だが、身をよせあつて互いに親愛のまなざしを交わす二人を見ると、ルルは、わけのわからぬ心の高ぶりが身内の奥のほうから湧き出て、女の生理のまじめさを、しみじみと、味わわされる羽目となってしまうた。



オランダにおけるナチの残虐話

風車小屋の美女

一九四四年七月、ワード中尉の所属するアメリカ空軍、一四九海蛇戦闘機隊は、英本土に駐屯して、連日ドイツ占領下の英仏海峡の海岸要塞に猛攻撃を加えていた。

ところが、不幸にして、その月の十九日の夜、ワードのシボルセアーは、優秀なドイツのメッサー・シュミットに射落とされ、彼は、落下傘でオランダの水田地帯に降下した。

左足骨折の激痛をこらえながら、オランダ名物の風車小屋のあたりまで逃げてきたとき、ワードは、ふと右手の凹地から、オランダなまりのわかりにくい英語で呼び止められた。

「あたしの風車小屋にかくまってあげる」
美しい金髪のオランダ娘だった。

ドイツ占領下のフランス、オランダ、ベルギーの各国には、地下組織のレジスタンスが勇敢に戦い、不時着した米英の飛行士

を救出していたので、その金髪の美女マルタの出現に、ワードはやっと生の息吹きをとり戻した。

久しぶりに、しぼりたてのミルクと、オランダチーズに舌つづみをうった。満腹になると、マルタの野性美に、ふと故郷のアイダホの恋人をよみがえらせた。

一週間目、ワードは、マルタの手引きで、人目をさけて、十マイルほど離れた入江に待っている英軍のボートに乗りうつることになっていた。

その日の午後、オートバイに乗ったナチの巡察隊が、ワードのかくれている風車小屋の前にとまった。

マルタは乾し草の中に彼を押し込み、すんなりした肢体に挑発的なポーズをつけた。が、ナチの巡察隊の前に歩いていった。顔見知りの、サイツチ頭のシュワイツが、マルタの姿に、今日ばかりは淫らな卑しい

目を向けずに、例のジューウ狩りに示した残忍な目で、マルタをにらみつけた。

「この男と女を知ってるだろう」

巡察隊の乗ったホロ付き車の中から、血にまみれた若い男女の死体がマルタの前にほうり出された。組織の一員エレヌと、フランスから連絡に来ていた同志の青年だった。エレヌの白い肌は血にまみれ、いくつも突き刺した銃剣の傷口がはじけて、黒々としていた。

「マルタ、三、四日前に、アメリカの操縦士がこの村に落ちたそうだな」

ワードは、いざというときに備えて拳銃を手にし、難解なドイツ語に耳をかたむけていた。マルタは、とんでもないといわんばかりに、肩をすくめた。

「吐かせるんだ！ このチーズ女に！」

シュワイツの怒声に、三人のナチは、停止した風車の羽根にマルタの手足をくくりつけた。

「マルタ、オレの気の短いのは、よく知ってるはずだ。お前がジューウでないことが幸いだと思い、ヤンキーの隠れ場所をいえ」
シュワイツのピカピカ光った長靴の拍車

が鋭い音を立てて鳴り、その右足がマルタの腰のあたりにとんだ。

「あーっ」

刃物のように鋭い拍車が、マルタのスカートを切り裂き、豊かな肌に食い込んで血が噴きだした。

「締めあげるんだッ」

二人のナチは、血にまみれた両肢にくっついたロープを、力いっぱい左右にひきしほった。マルタは、風車のきしむ音をかき消すように絶叫した。

ちょうどそのとき、友軍の大規模な爆撃がはじまった。鬼のようなナチどもは、ぐったりしたマルタをくくりつけたまま町の方角へ去っていった。

ワードは、彼らの立ち去るのを見届けると、すぐマルタのもとに走った。マルタは気を失っていたが、生命に別条はなかった。

それからワードとマルタの奇妙なピッコ同士の脱出が始まった。十マイルの道はひどく遠いものに感ぜられた。

海が見えた。頭上を飛んでゆく友軍機が低空で二人を援護し、無事に入江のボートに乗りうつることができた。△村松俊一▽



アメリカ南北戦争秘話

イレズミした女スパイ

「ハダカになっていただけませんか、カホーン夫人」

南軍の情報将校マジョリーは、だぶだぶの軍服をかきあげながら言った。そして、赤ら顔に愛想のいい笑いを浮かべながら、夫人のブラウスのボタンをはずし、下着の一枚一枚をはぎとりはじめた。

一八六三年十月三日、初秋とはいいいながら、むし暑い午後のことである。

カホーン夫人は、南軍の情報機関に加わって働きたいと申し出たのである。つまりスパイとなるというのだ。そこで、マジョリーは、一応、身体検査をしなければならなと思ったので、夫人に言ったわけである。夫人が、南北両軍の情報を、じつによく知っているの、マジョリーが不審を抱いた結果でもあったからである。それもそのはず、カホーン夫人は、北軍きっての優秀なスパイで、南軍の心臓部に食い入って

逆スパイをやろうという大胆不敵な計画を胸に秘めていたのである。

×

着ているものを脱ぎすてた二十七歳のカホーン夫人の裸身は、輝くばかり美しく、魅力に富んでいた。金髪が白い肌と照り合えて、妖しいなまめかしさだった。

マジョリーは、まぶしさに、思わず目をつぶったが、怪しいフシは、何ひとつ発見されなかった。

だが、マジョリーは、用心ぶかく言った。「私はまだ、しっかりした確信が持てない。確信がもてないうちは、あなたを、私たちの仲間に入れるわけにはいかない。だが、私たちみんなが共通に身に施したものを、あなたもまた行なうというなら、考えてみましょう」

「みなさんに共通のものって……？」

「イレズミです。私たちはみな、バラの花

の半分のイレズミをしているんです」

「どうぞ、あたくしにも……」

と、カホーン夫人はいった。そういう彼女の青い目は、興奮でキラキラしていた。

「どのくらいの大きさのバラを、からだのどこへなさるのですか」

そうきかれたとき、マジョリーは思わず赤面した。というのは、美しいカホーン夫人のすんなりした脚を、自分の毛むくじけらな手でさすることをそのとき心の中で空想していたからだだった。

×

婦人に対するエチケットとして、彼は後ろをむいた。だが、彼女の美しい肌にメスを入れる光景を思って、身を堅くした。

カホーン夫人の、シミひとつない皮膚に女刺青師の、絵の具を含ませた針が、ズブッ、ズブッと刺されていった。

彼女の肉にくいこむ針の音が、部屋の静寂を破って、マジョリーの耳に聞こえたとき、彼の興奮は絶頂に達した。イレズミがすむのを待ちきれず彼は、腕のいい売春婦のようにイレズミをしたカホーン夫人を、狂おしく抱擁した。

△竹内信次▽



灼熱の砂漠の中の虐殺！

ハレムみな殺しの歌

シーク族の首長アリハムは、残忍冷酷なことでは、かつてのキューバのヒメネスよりも、一日の長がある。

彼のハレムには、数百人の世界各国の美女がとらわれ同然の姿で、今もなお酒池肉林の秘殿に呻吟している。

三、四年前に、ハリウッドのミス・コンテストに出場したミス・モロッコのリュシーも、莫大な金と、石油発掘権を餌に、巧みに、アリハムのハレムにかこわれていたのだが、その後、まったく消息を絶ててしまった。

つい最近になって、アメリカの一新聞記者が、アリハムのハレムにおいて、大ぜいの女たちが、虐殺されたことを報じていたが、リュシーも、その殺されたハレムの美女の一人であった。

アリハムは、日ごとにふえてゆく女たちを新陳代謝するために、陰險な手段として

女たちの間に密告制をもうけて「合法的」な殺人を、日夜くりひろげていたのである。

たとえば、アリハムの私事を批判したり、定められたハレムのルールに少しでもはずれたとあれば、アリハムは、彼の黄金のキャデラックに女たちを乗せ、焼けつくような砂漠の奥へ車を飛ばし、ころあいを見はからって、女の衣類を剥ぎ、裸にして、砂中に一人一人転がしていった。

裸で砂中にほうり出された女は、ものの五分もすると、焼けた砂のため体中に赤く火ぶくれを生じ、太陽の直射に目をつぶされ、口はかわいて腫れ裂け、三十分後

には狂人となって死んでゆくという残酷な方法をとった。

ことにリュシーの最後は、アリハムにとっては許すことのできない怒りをそのまま



に、処刑となつてあらわれた。

アメリカの石油発掘の技師カークが、ときおりアリハムに会いにくるのを、リュシーが見染めたというのだから、アリハムの激怒は、キャデラックの殺人ではすまされなかった。

日ごろから、白人の女に敵意をもっていた奴隷女の密告で、カークとリュシーは、密会の現場を、アリハムの屈強な黒人の殺し屋に見つかつてしまった。

まず、カークがムチで全身にわたつて叩かれて気を失つた後、カークに抱きついたリュシーを引きはなし、三つのムチが鋭い音を立てて、豊かな乳房と腰に鳴った。

やがてリュシーの絶叫と同時に、はちきれそうな乳房は、パツクリと傷口がはじけて血が吹きとんだ。

三人の黒人は、つかれたように手をふり腰をゆりうごかし、足をふんで、リズムをかもし出す。

緑のジュータンに、リュシーは全く這う気力もなく、目を見開き、一つ一つ、おのれの生命の絶たれる時間を待つばかりになった。

やがてムチ打ち

が終わると、三人の黒人はリュ

シーをかき抱きながら凌辱

を加えた。

はり裂けた

腹部に両

手を入れ

るもの、

ちぎれ

んばか

りの乳

首に歯

をたて

るもの、

それは、

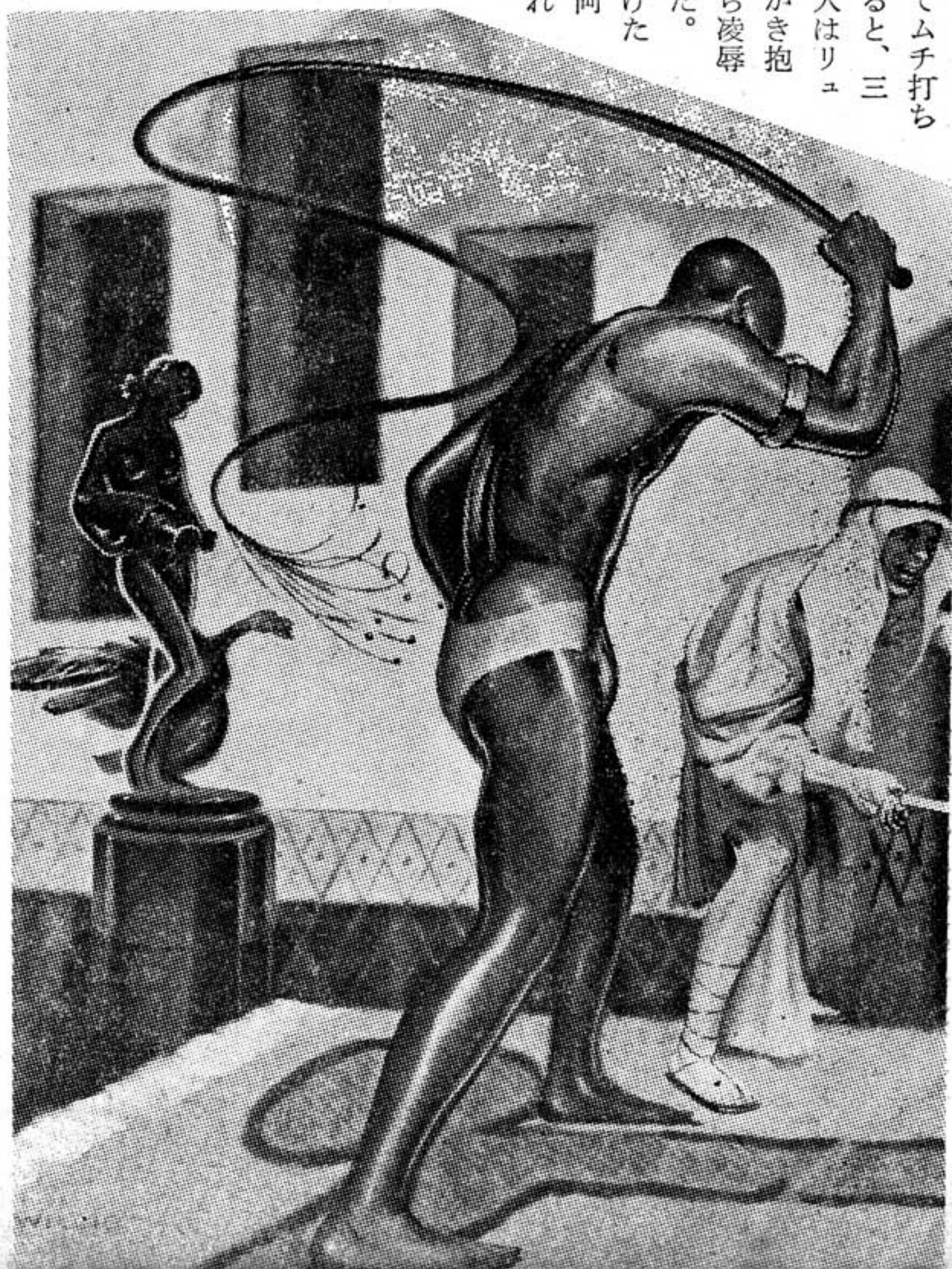
ちよう

ど牝羊

を襲う

黒ヒョウの姿に似た無残なものだった。

カークが気がついたとき、彼の目は、太陽の直射で完全に失明していた。それよりも、彼が異常な肉塊を下半身に乘せられて



いるのを知ったとき、「おう神よ！」と絶叫した。リュシーのねじ切られた胴のくびれから腰のあたりまでが、すっぽりとカークの局部をつつんでいた。八浅海良一

混血土人女のいけにえ

モウモウ団恐怖の檻



モウモウ団の殺戮は、執拗につづけられた。

白人たちが身の危険を感じて脱出しようとしたが、英軍と連絡する以前に、山地に掘ったモウモウ団は、十三号道路を完全に遮断し、白人のクラブを焼いた。

モウモウの残虐な殺戮は、かつてのアメリカ西部のモホークやアパッチの比ではない。彼らは、インディアンが自由に生活している現在でさえ、モウモウのキクユ族は長いあいだ奴隷のように圧制されてきたので、その白人への憎悪は、問答無用の鬼畜にひとしい残虐さであった。

ことに英人とキクユ族の混血人に対する彼らの報復は、ウバングの町を戦慄させた。混血人は、土人よりも高級な生活と、衣食住が保証されており、日ごろから英人との関係が密接であったので、彼らの憎悪は、英人以上だった。

白人の男は、蜂の巣のように身体じゅうに穴をあけられ、目、耳、鼻、局部をそがれて、路上に並べられたが、女に対しては長時間にわたって、屋内、路上を問わず、凌辱と殺人が行なわれた。ある医師の夫人

は腹を立ち割られ、大腸をつかみ出されてそれを十メートルも長々と、焼けつく大地に露出した。

また、現地人の学校の若い一女教師は、ひん死の白人の男の右手を局部にスッポリとさしこまれ、そのあと、首と胴を切断された。

白人たちのほとんどが殺されたあと、モウモウは、混血人を一カ所に集め、丸木で作った檻の中に入れた。

勝ち誇った夜がおとずれると、一人一人その檻から連れ出されて、彼らのいけにえにされていった。

気を失った混血の娘が、ズルズルと引きずられて、中央に立てられた杭にくぐられ、と、いっせいに、手にしたたいまつが娘の身体に飛んだ。

みるみるうちに娘のやけたただれてゆくのが、奇の中に閉じ込められた人々にもよく見えた。

やがて、二人の恋人同士がひき出された。男は長身の巡査だが、女は黒かった。恐怖におののく男の両足を大の字に左右に開いて、失神した女をその上に乗せた。

奇妙な歌と踊りが二人を取り巻いてつづけられているあいだ、女は男の上でうごめいた。

まず、女の背中から下方に槍が突き通った。女は悲鳴をあげてのたうつと、こんどは重なり合ったその間に、燃えさかるたいまつが、何本もさし込まれた。

シュツ、シュウツとあふれる血に、火が脂を得て音を立て、皮膚がただれて白くすんだ肉がはじけて火を呼ぶ。

翌日、英軍が入って来た。

モウモウは、あとかたなく付近の山地に散っていった。

これが、史上まれに見るモウモウの虐殺事件であるが、町のいたるところに転がった白人の死体は、どれをみても五体満足になっているものはなかった。

ある兵は、教会の入口で牧師の死体をみつけた。収容しようとする、その牧師の首ははなれ、黒いガウンの下は、なんと、水々しく成熟した若い娘の死体であり、おどろいたことに、胎児が娘の股の間にはさまっていたという。

△大山健彦▽

泥沼に巣くう人食い亀

海亀島の死の闘争

十二月の銀色の月光が、海亀の群棲する低い湿地へ流れ込むハウサトニツクの渦巻く水を、にぶく、無気味に照らしていた。そこは、膝を没する泥の沼地であった。

「すごく、ウヨウヨいるな」

「ぐずぐずしねえで、早いところ渡ってこい」

「地獄の一丁目みてえなところだな」

声をかけ合いながら歩いている一行は、測量のために派遣されたベントリー、グラッドストン、ジョイの三人だった。

この湿潤の沼地は泥がふかく、泥と同じ色の亀が群がりすんでいて、旅行者が知らずに迷いこむと、海亀の鋭いクチバシが、皮をくい切り、肉の最後の一塊までズタズタに食いちぎって、たちまち白骨にされてしまうといわれていた。

だから一行は、お互いに励ましあい、泥に足をとられないよう注意深くすすんだ。「ジョイ、助けてくれ」

突然、一行のうしろで、金切り声が聞こえた。ベントリーの声だ。

「噛みつかれたんだ……助けてくれ、だんだん沈んでいくっ！」

わめきたてるベントリーの狂気じみた声が、次第に泣き声にかわっていく。

ジョイは、ウェイダー（川歩きのための長靴）の向きをかえ、パーカ（頭巾つきの毛皮ジャケット）の肩をゆすりながら、ベントリーの声を目掛けて足を早めた。だが、うっかりして、泥と間違えて亀を踏みつけると、ベントリーの二の舞になるから、竿で手さぐりに行かねばならない。

「ジョイ、お願いだ。早く来てくれ」

ベントリーの声は、小さくなっていく。

「おお、今いくぞ」

と声をかけるのだが、ゴム引きのブーツを着ているので、ともすると泥に足をとられそうで、ジョイも思うままにならない。

「あ、食いつきやあがる、こん畜生ッ！」
一行の先頭を進んでいたグラッドストンの声が、そのときふいにジョイの耳をうった。彼もまた、踏みはずしたのだ。だがジョイは、今は、そっちを構っていられない。

やっとたどりついてベントリーの手をひっぱってやると、腰から下に何匹もの亀がまつわりついている。ジョイは、一匹ずつ力をこめて、亀をベントリーから引っぺがす。すると、亀は、ベントリーの肉を食いきって離れる。そいつを、できるだけ遠くへ放りなげて、また次の一匹にかかる。ベントリーの足は血まみれになったが、それでも、やっとのことで、助かった。

一息ついた二人は、シャニムニ、グラッドストンのもとへ急いだ。今しがたまで声のしていた彼の声が聞こえなくなったことが、気がかりだった。

グラッドストンは、半身を泥に埋もれて倒れていた。しかも、無残な姿で。指のない手、鼻と耳のなくなった頭。そして顔がちぎられた肉塊だ。血、血、血の海！。二人は呆然と立ちつくした。 八水野幸吉



恋 慕 執 念

中 川 清 太 郎

小 田 利 美 ・ え

1

佐伯主膳は、目に嫉妬の炎を燃え上がらせて、物かげからじっと見つめていた。その視線の先には、旅装束の若侍と、その旅立ちを送る若い娘の姿があった。

「うぬ、あんなやつがいたから、浪乃は、ワシの意に従わなかったのだな。よし、みている」

思わず主膳の口からもれたことばは、悪鬼のつぶやきに似た陰険さをもっていた。

そんなまなざしで見られているとも知らず、若い二人は、しばし



植竹圭之助は、いとしい恋人をふりかえって、

す

帰ってまいりま

次第、飛んで

ご用がすみ

ぬ。国表の

とはござら

「案じるこ

であった。

の心のたけ

せいっぱい

それが浪乃としては

「お帰りくださいませ」

無事で、一日もお早く

「圭之助さま、ご

るのである。

にひたってい

の別れの情



にっこりした。

2

佐伯主膳は、八百石取りの旗本だった。先ごろ妻を亡くして、ヤモメ暮らしではあるが、その放蕩ぶりは、仲間の眉をひそめさせるほどであった。浪乃は、その佐伯家の腰元だった。十七歳の、ういういしい娘ぶりが、かねて主膳の情炎をあおりたてて、何度となく口説かれた。



だが浪乃は、そのたびに柳に風と受け流して、意に従おうとしなかったのだ。

せかれればつもののが恋の思い——主膳は、浪乃いとしさの情炎と、さつき見た浪乃と若侍の仲むつまじい姿を思い浮かべて嫉妬の心に、きょうこそは力づくでも浪乃を征服してやろうと思うのだった。

浪乃は、そんな主膳の心も知らず、さつき旅立っていった恋人

植竹圭之助の

おもかげを心に思い描き、いとしさに身も細る思いだった。

利





3

その夜、主膳の部屋へ呼ばれた浪

乃は、

いきな

り抱きしめ

られた。

「い、いけ

ません、お

殿さま。ど、

どうぞ、

お、お許

しを……

必死に抵

抗するのは、

処女のはじ

らいだけで

はなく、恋しい人のおもかげ

を胸に描きつづけているからで

ある。

「そちは、ワシの心が、わからぬの

か。先日から何度も言うように、そちを、八百石の旗本佐伯家の奥に

する……」

「わ、わたくしには、き、決まった人が……」

「えーい、あの若僧のこと

か。うぬ。あんなやつが、

なんじゃ。今宵は、どんな

ことをしても、そちにウン

と言わせねばおかぬぞ」

「ど、どうぞ、お、お許し

を……」

主膳は放蕩者だけに、

女を抱くときは、女が

自分から帯をとくので

なければつまらぬと、

彼なりの「哲学」を

もっている。だ

から、押えこん

で浪乃を思い

のままにす

る気になれ

ないのだ。×

て、そして自

すところにこそ

いう、彼なりの「色

だから、言うことをきか

刀でおどすことにした。



×おどしてせめ

分から身を投げ出

征服の快感があると

道哲学々をもっている。

ぬ浪乃をしばりあげて、

おどしても、すかしてもウン
といわない浪乃に、主膳はいよ

4



「ウンといえ。
ウンと言わね
ば、不義は
お家の法度
だ。切る、
切りす
てるぞ」

いよ残忍な思いをつのらせるのだった。いったん縛った浪乃の縄をほ
どき、その帯に手をかけた。裸にされる処女の羞恥に訴えて、女に言
うことをきかせようと考えたか
「お、お許し、お許しくだ
浪乃が、身をちぢめ
帯は主膳の手もとに
だはコマのように
「と、殿様、ど
「ええい、言

うぞ、お、お許しを……」
うな。余の意に従うまでは、やめぬは」
やにわに、浪乃の着物をはぎとった。
「ああ……」

て許しを乞うのに耳もかさず、
たぐられて、その先で浪乃のから
回った。
さい」

浪乃は、泣くような声をあげて、思わず下着の胸もとをおさえ、背を波うたせながら、逃がれようとする。

その上からのしにかかった主膳の腕が、とけて落ちていたしごきをつかむと、たちまち、浪乃を後ろ手にくくりあげ、そのしごきの端を、鴨居にうった太い折れ釘にかけ、力まかせに、しほりあげた。

めりめりっと音がしたのは、その釘がしなった音か、それとも浪乃のどこかの骨がきしんだ音か。

浪乃は、無残にも足首を上、さかさに宙吊るしの姿になった。元結の切れた黒髪が、さあっと海草のように乱れた。

「うぬっ、まだ、ウンと申さぬか」
「どうぞ、お気のすむように、ご、ご成敗せいばいくださいませ」



浪乃は殺されても、恋しい圭之助のためみさおに、操みさおを守ろうと思いきめた。

「殺すものか。うぬが、ワシの腕に身を投げかけるまでは、殺していいものか」

「そ、そればかりは、し、死んでも、いやです」

「な、なにっ！ そんなにこの主膳が嫌いか。いやさ、あの若僧が恋しいか。それならば、からだに、ウンと言わ

せてやるわ」

ピシリッ！

ムチの音が、浪乃の白い肌に鳴った。

「ひいっ！」

ピシリッ！

ムチの音が鳴るたびに、浪乃の、か細いからだは、はねあがるよう

に痙攣し、絶え入るような悲鳴が、夜の静けさをつんざく。
ピシリッ！ というムチの音と、ヒイッ！ と唇をついて出る悲鳴
が、交互に合わない合わさって、いつ果てるとも知れない。

しごきにくくられたまま、へし折れそうに釣りあげられた足も、手

も、まっ赤に充血して、ふくれあがっているのに、浪乃の顔面は、蒼
白に変じて、ひたいには、べっとりと油汗がにじみあがった。
「うぬ。あくまで言うこ
とをきかぬか」

とサジを投げた主膳は、浪乃をハ
ダカにむいて縛り

あげて一夜を
おいた。その夜中、
浪乃は舌を噛み切
って、死んでいた。

判

≡風俗奇譚≡の旧号の在庫が少々あります。お申し込みください！

臨時特集号

(二百円)

写真(口絵) 縋の魅惑十景
特集(口絵) 密林の危機・梅の刺青・白髪鬼
秘帳(口絵) これが異常性欲だ(研究と実話)
明帳(口絵) 性的珍聞史
妊青(口絵) 性的珍聞史
刺青(口絵) 性的珍聞史
セッ(口絵) 性的珍聞史
女通(口絵) 性的珍聞史
私通(口絵) 性的珍聞史
手記(口絵) 性的珍聞史
尿道(口絵) 性的珍聞史
金魚(口絵) 性的珍聞史
ある(口絵) 性的珍聞史
麻薬(口絵) 性的珍聞史

艶妖特集号

(二百円)

多色刷(口絵) かぎや店先……鈴木春信筆
写真(口絵) 梅の十字架九景
口絵(口絵) 梅の十字架九景
特集(口絵) サデイズムの種々相
死体(口絵) 性的珍聞史
現代(口絵) 性的珍聞史
現代(口絵) 性的珍聞史
刑罰(口絵) 性的珍聞史
白人(口絵) 性的珍聞史
愛人(口絵) 性的珍聞史
柔肌(口絵) 性的珍聞史
回教(口絵) 性的珍聞史
白肌(口絵) 性的珍聞史
女の(口絵) 性的珍聞史
妊婦(口絵) 性的珍聞史
犬に(口絵) 性的珍聞史

悦虐特集四月号

(二百円)

多色口絵(口絵) 五彩のサルタン
グラビア(口絵) 美女緊縛・濡れた悦楽・ほか
口絵(口絵) 小田利美責め絵集
特集(口絵) 鞭打の心理と実相
焼け(口絵) 鞭打の心理と実相
人間(口絵) 鞭打の心理と実相
地獄(口絵) 鞭打の心理と実相
火あ(口絵) 鞭打の心理と実相
鴉の(口絵) 鞭打の心理と実相
変態(口絵) 鞭打の心理と実相
ピスト(口絵) 鞭打の心理と実相
女の(口絵) 鞭打の心理と実相
伯爵(口絵) 鞭打の心理と実相
性毛(口絵) 鞭打の心理と実相
情事(口絵) 鞭打の心理と実相
男を(口絵) 鞭打の心理と実相
皮バン(口絵) 鞭打の心理と実相

耽美法悦特集五月号

(二百円)

多色口絵(口絵) 空中人魚
グラビア(口絵) 捕われの人魚・裸身緊縛ほか
口絵(口絵) ルーベンスの名画にみる変態性欲
特集(口絵) 同性愛の種々と実相
マゾ(口絵) 同性愛の種々と実相
女の(口絵) 同性愛の種々と実相
吹上(口絵) 同性愛の種々と実相
サデ(口絵) 同性愛の種々と実相
女の(口絵) 同性愛の種々と実相
幽霊(口絵) 同性愛の種々と実相
性的(口絵) 同性愛の種々と実相
マゾ(口絵) 同性愛の種々と実相
深夜(口絵) 同性愛の種々と実相

春の臨時増刊号

(二五〇円)

多色口絵(口絵) 近衛家の老女村岡……月岡芳年筆
写真(口絵) 捕われの白肌十三景・秘画展覧会
(二色口絵) 小田利美責め絵集
(口絵) 責められる肌・妖しき陶酔・ほか
変態(口絵) 鞭打の心理と実相
猫の(口絵) 鞭打の心理と実相
若い(口絵) 鞭打の心理と実相
獣婚(口絵) 鞭打の心理と実相
吸血(口絵) 鞭打の心理と実相
男を(口絵) 鞭打の心理と実相
実兄(口絵) 鞭打の心理と実相
会員(口絵) 鞭打の心理と実相
魔の(口絵) 鞭打の心理と実相
舌を(口絵) 鞭打の心理と実相
死体(口絵) 鞭打の心理と実相
女に(口絵) 鞭打の心理と実相

画報風俗奇譚

定価 二八〇円

昭和三十五年五月五日印制
昭和三十五年五月十五日発行

編集発行人 高倉一
印刷所 刊行会印刷部
発行所 文献資料刊行会
電話東京(291)二九一八番